

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

首長制とキリスト教： ミクロネシア，ポーンペイ島とコシャエ島の事例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Pohnpei (Ponape) Kosrae chieftainship Christianity socio-cultural change 作成者: 中山, 和芳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004262

首長制とキリスト教

——ミクロネシア，ポーンペイ島とコシャエ島の事例——

中山 和 芳*

Chieftainship and Christianity on Pohnpei and Kosrae, in Micronesia

Kazuyoshi NAKAYAMA

In the early 19th-century Pohnpeian and Kosraean societies, there were many areas of similarities in social and cultural practices. Each had chieftain structures denoted by a system of titles. All land was owned by the paramount chiefs (Nahnmwarki on Pohnpei and Tokosra on Kosrae). Their subjects were allowed to use the land, paid tribute in return, and used respectful language to them.

The Pohnpeian and Kosraean experiences of Western contact in the 19th century were also basically similar. From the 1830s increasing numbers of whalers visited the two islands. Pohnpei and Kosrae experienced a depopulation caused by diseases which foreign ships brought. In 1852 American Congregational missionaries came to the two islands to propagate their religion. Later both islands accepted Christianity.

On Pohnpei Christianity was accommodated into the existing social and political framework, and Pohnpeians retain their traditional chieftainship even today. But on Kosrae the acceptance of Christianity caused the abandonment of the chieftainship. In spite of the seemingly similar situations in the two islands, the outcome in each case was markedly different.

The purpose of this paper is to examine why there was such a great difference between Pohnpei and Kosrae. There are several factors which influenced processes of change and continuity.

* 東京外国語大学，国立民族学博物館併任

Key Words : Pohnpei (Ponape), Kosrae, chieftainship, Christianity, socio-cultural change

キーワード：ポーンペイ(ポナペ)，コシャエ，首長制，キリスト教，社会・文化変化

First, although the two societies suffered a decline in population, Kosrae, because of the smaller size of its population, was more vulnerable to changes than was Pohnpei. On Kosrae it became difficult to find an eligible candidate to the paramount chief title.

Second, there were five autonomous chiefdoms on Pohnpei while Kosrae had a unified polity. On Pohnpei a strong rivalry existed among the five chiefdoms and each of them often pursued different policies from the others. Therefore unified action was hard to attain.

Third, Pohnpei was subjected to a far wider range of foreign influences than Kosrae. On Pohnpei many beachcombers settled. On Kosrae they were discouraged from remaining on shore after their conflicts with the Kosraeans. The expulsion of the beachcombers from the island was possible because of the political centralization of Kosraean society. Spanish government officials and soldiers, Catholic priests and German government officials and soldiers came to Pohnpei, but none of them settled on Kosrae. Therefore, when they stood at the crisis caused by depopulation and were looking for a new model for their society, there were many examples on Pohnpei, while the Protestant teachings were the only one for the Kosraeans.

Fourth, Spanish and German government officials appointed the Pohnpeian chiefs to the post of native headman to maintain order on the island. The foreign governments helped Pohnpeian chiefs to maintain their positions. The Spanish officials were indifferent to Kosrae. Although the Germans appointed the Kosraean paramount chief to the post of native headman, it was too late to retain the chieftainship.

The difference in those factors mentioned above caused the Kosraeans to abandon the chieftainship system and the Pohnpeians to manage to maintain it. On Kosrae, conversion to Christianity is regarded as discontinuous change, while on Pohnpei the process of change since Isokelekel, the first Nahnmwarki, is perceived in terms of cultural continuity.

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| I. はじめに | V. コジャエ島における首長制から教会への移行 |
| II. ポーンペイ島の首長制とキリスト教 | VI. 現在のコジャエ島社会 |
| III. コジャエ島の首長制と王位の継承 | VII. 存続する首長制と廃止された首長制 |
| IV. 人口減少とコジャエ島の首長制 | |

I. はじめに

ミクロネシアのカロリン諸島の東部に位置するポーンベイ島（旧名ポナペ島）とコジャエ島は、560キロを隔てて隣りあっている。ポーンベイの面積は375平方キロ。コジャエは116平方キロで、ポーンベイの約3分の1の大きさである。1980年の人口はポーンベイが22,081人、コジャエが5,491人である。

西洋との接触の始まった19世紀のはじめには、この2つの島は多くの共通する特徴を持っていた。2つの島の伝統的な政治体制は首長制であり、しばしば王と呼ばれる最高位の首長は絶対的な権力を有していて、王位は特定の母系氏族員によって世襲的に継承されていた。王は神の子孫で神聖な存在と見なされ、彼らの権威は超自然的な制裁によって守られていた。すべての土地は王のものと考えられていた。一般の人々は土地の使用を認められたが、その返礼として王に貢納する義務を負った。政治組織は位階のヒエラルキーを構成し、それには敬語の体系と表敬行動が伴っていた。さらに、ポーンベイとコジャエには類似した巨大な石造建築遺跡が存在する。そして、ポリネシアや一部のメラネシア地域で見られるカヴァの飲用の慣習は、ミクロネシアではこの2つの島だけに存在した。

ポーンベイとコジャエでは、西洋との接触の状況もきわめて類似していた。両島とも1820年代に西洋との接触が始まり、1830年代より多くの捕鯨船が寄港するようになった。外国からもたらされた病気が流行して、急激な人口減少が生じたことも共通している。さらに、1852年にアメリカのプロテスタント（アメリカン・ボード）の宣教師によるキリスト教の布教活動が開始されたことも、そして、その後島民がキリスト教に改宗したことも同様である。

このように、ポーンベイとコジャエでは、伝統的な社会・文化の多くの側面で共通する特徴をもち、歴史的状況も類似していた。しかしながら、両島の間には重要な相違も存在する。ポーンベイでは現在に至るまで首長制を維持しているのに対して、コジャエにおいては島民自身の手で首長制を廃止したのである。

本稿は、一見すると似たような状況にあった2つの島において、首長制の存続に関して、何故このような相違が生じたのかを明らかにすることを目的としている。

筆者は、ポーンベイにおいて1980年7月～1981年4月に現地調査を行なったが、コジャエ島はまだ訪れる機会を得ていない。したがって、以下のコジャエに関する資料はすべて文献調査にもとづくものである。

本稿は、ポーンペイとコジャエの首長制の変化を比較考察するものであるが、ポーンペイの首長制に関しては、既に述べたことがある。そこで、ポーンペイの首長制に関しては、本稿では、要約して述べるに留める。詳しくは、拙稿[中山 1985, 1986, 1988, 1989]を参照されたい。

Ⅱ. ポーンペイ島の首長制とキリスト教

ポーンペイの神話的歴史は、Bernart [1977]によると、以下のものであった¹⁾。

ポーンペイの人々は、人が住み始めてから今日までの島の歴史を4つの時代に分けている。最初は他の島々から人々がポーンペイ島に移住してきた時代であり、次いでジャウ・テレルウ王朝の時代、3番目がナンマルキという称号を持つ首長により統治された時代、最後に西洋と接触するようになった時代である。これら4つの時代の区分は、様々な外来者の到来を契機としているという共通の特徴を持っている。

島の歴史は、遙かかなたの島より16人の男女を乗せたカヌーが、「天の軒」の向こうに土地を求めて、海に乗りだしたことから始まる。一行は蛸と出会い、リーフの存在を教えられた。カヌーはリーフにたどり着き、人々は石と土とでリーフを土地に変えた。人々はこの土地を「石の構築物」(ポーンペイ語で *pei*) と呼び、この石の上のすべてのものを「ポーンペイ (Pohnpei, 石の構築物の上)」と呼んだ。そして、このポーンペイを守るために一組の夫婦を残して、一行は自分たちの島に戻っていった。

島に残った夫婦にはたくさんの子供ができ、この土地には人が増えていった。その後、様々な地域から人々が5度にわたってやって来て、様々な植物や文化が島にもたらされた。しかし、統治者や貴族はまだいなかった。

そして、オロシーバ (Olosihpa) とオロジョーパ (Olosohpa) という兄弟によって率いられたカヌーが島に到着した。彼らは島への7番目の来訪者であった。彼らは祭祀場を作る仕事を始めた。ポーンペイ中の人々が手伝って、ナン・マトル (Nan Madol, ポーンペイ島の南東部、マタラニームの港内のタモン島にある巨石建築物) を作りあげた。

やがてオロシーバは死亡した。オロジョーパは、ジャウ・テレルウ (Sau Deleur) という位を得てポーンペイ島の最初の支配者となり、ナン・マトルに住んで全島を統治した。すべての人々が彼に従った。オロジョーパは人々に封土と位を与えた。ジャ

1) ポーンペイの神話的歴史については、清水 [1990] が詳しく分析している。

ウ・テレウル王朝の歴代の王には、良い王もいたが悪い王もいた。悪い王は人々を残酷に扱って抑圧するようになり、人を食うこともしたので、次第にシャウ・テレウル王朝は人々の信望を失っていった。

雷の神のナーンシャプエ (Nahnsapwe) はシャウ・テレウル王に捕えられたが、逃げ出してコジャエ島に渡った。ナーンシャプエはコジャエ島の女性との間に男子をもうけた。子供はイショケレケル (Isokelekel) と名づけられた。イショケレケルは成長すると、333人の男女・子供を引きつれてポーンベイへ向かった。そして、彼はシャウ・テレウル王を倒し、ナーンマルキ (Nahnmwarki) という称号を名乗った。これにより、ポーンベイ島は第3の時代を迎えることになった。

シャウ・テレウル王朝の時代には、王が全島を支配していたが、イショケレケルはマタラニーム地域のみを支配し、他の2つの地域は他の首長が支配した。そして、西洋人の来訪により、ポーンベイは第4の時代を迎えた。以上が、Bernartの述べるポーンベイの神話的歴史の要約である。

3人の首長が支配していたポーンベイだが、その後、内紛があって分裂した地域もあり、西洋社会と接触するようになった19世紀のはじめ頃には、マタラニーム、ウー、キチー、ネット、ショカーシの5つの独立した首長国が存在していた（この政治単位は今日に至るまで継続され、現在は *municipality* と呼ばれる行政単位となっている）。

ここで、ポーンベイのナーンマルキ首長制がどのようなものであるかを説明しておこう。個々の首長国には、ナーンマルキとナーニケン (Nahnken) という2人の最高位の首長がおり、彼らをそれぞれの頂点とする、12の位階を伴う2つの系統があった。人類学では、ナーンマルキの系統をA系統、ナーニケンの系統をB系統とし、位階の順に数字を付けて、A1, A2, A3, …, B1, B2, B3, …のように表現することがある。A1はナーンマルキ、B1はナーニケンを示す。A系統の12人 (A1~A12) とB系統の12人 (B1~B12) の、計24人の首長は「貴族 (*sohpeidi*)」と呼ばれ、政治的・社会的に重要な役割を果たした。貴族以外の人々は「平民 (*aramas mwahl*)」と呼ばれたが、平民にもナーンマルキから称号が与えられた。首長国は字 (*kousapw*) に分かれ、字はナーンマルキが任命する字の長によって支配された。個々の字は、いくつかの大家族によって構成されていた。

貴族の2つの系統の称号は、それぞれ特定の（首長国によって異なる）母系氏族の成員によって占められた。個々の系統における称号保持者の順位は、出生順に格づけられた母系氏族内部の系譜的序列にもとづくというのが原則である。死亡や、その他の理由で空位が生じた場合、その下の称号保持者が1つずつ順に昇進するのが理想的

な形態であった。けれども、称号の獲得（とくに、下位の称号）には、軍事的な手柄とか、祭宴における貢納も重要な要素であった。つまり、政治的・社会的地位の上昇は、生得的な要因だけでなく、個人の努力によるところも大きかったのである。ナンマルキやナーニケンを出す氏族の成員でない平民の場合、地位の上昇は、まったく個人の力によっていたのである。ポーンペイの首長国は、理想的にはナンマルキを頂点としたヒエラルキーを構成して、個人の地位は称号によって示された。

首長国のすべての土地はナンマルキとナーニケンが所有するものであり、人々は土地の使用に対する返礼として、ナンマルキやナーニケンに対して祭宴（*kamadipw*）を催して収穫物を貢納する義務を負った。貢納された品々は位に応じてその場で分配された。祭宴はより高い称号を獲得して政治的・社会的に地位を高める重要な機会であったから、人々は競って貢物を献上した²⁾。

さて、このような首長制を持ったポーンペイ島が西洋と初めて接触するのは1820年代の終りのことである。1828年にロシアの探検船 *Senyavin* 号が寄港している。1830年頃には難破したシドニーの捕鯨船の乗組員が島にたどり着き、そのうちの1人、James O'Connell という男が1833年まで島に滞在したことがわかっている [O'CONNELL 1972]。1830年代になると、交易船が島を訪れるようになり、捕鯨船も補給のために寄港するようになる。太平洋地域での捕鯨業は、1840年代から50年代にかけてがピークであり、1855、56年には、年間50隻以上の捕鯨船がポーンペイ島に寄港した [HEZEL 1983: 132]。捕鯨船の寄港が多くなると、それにつれて、船から逃亡して島に居着く、ビーチコーマーと呼ばれる人々も多くなった。1850年には、こうした人が150人ほどもいた [Friend 1850: 68]。彼らは、首長の庇護の下で暮らし、首長のために寄港する船との交易に従事した。交易によって、様々な西洋の品が大量にポーンペイ島にもたらされた。衣類、布、銃、弾薬、斧、ナイフ、タバコ等々である。しかしながら、伝染病も島に持ち込まれた。1854年には天然痘が島中に蔓延し、1万人と推定される人口は半分に減った。島民は自分たちはやがて絶滅してしまうだろうと感じていた [The Missionary Herald (以後 MH と略記する) 1855: 131-132]。人口減少は1890年代まで続いた。

1852年には、アメリカのプロテスタント（アメリカン・ボード）の宣教師がポーンペイにやってきて布教を開始する。首長たちは、宣教師が島に居れば外国の船の寄港

2) 後述するように、ポーンペイのナンマルキ首長制は、土地が私有化されるなど若干の変化は生じたものの、現在に至るまで続いている。首長制に関しては、Riesenberg [1968], Petersen [1982], Shimizu [1982] を参照。

が多くなるとして、宣教師を受け入れる。しかしながら、宣教師は、ビーチコーマーとは違って、首長の権威に服しようとしないうし、酒やカヴァを止めるように言い、首長の特権である一夫多妻にも反対する [MH (Sturges) 1860: 35]。やがて首長たちは宣教師の布教活動に異を唱えるようになる。

しかし、1854年に天然痘が流行して人口が急激に減少した時に、島の神々へ祈願してもなんの役にもたたなかったのに、宣教師の施した種痘はかなりの効果をあげた [MH (Sturges) 1856: 162]。また、捕鯨業が衰退してくると、寄港する捕鯨船の数は減り、ビーチコーマーの数も減少した。そこで、西洋の品々の供給源としての宣教師の重要性が高まった [MH 1860: 35, 290]。布教の方針が、首長を中心としたものから、平民を対象とするものへと変えられ [MH (Sturges) 1860: 136]、やがて、キリスト教は平民層の間に浸透していった。

1860年に初めて3人の改宗者を獲得して以来、信徒の数は飛躍的に増えていった。宣教師の影響力が大きくなるのに伴って、首長のなかには、宣教師や増大しつつあった信徒集団の力を利用して、政治的優位に立とうとする者も出現した [MH (Sturges) 1865: 199]。1870年にはアメリカの軍艦が寄港し、首長たちは信仰の自由を保証する条約を結ばざるをえなかった [Friend 1870: 102]。キリスト教に敵対する首長は次第に苦しい立場に立たされた。一方で、今や信徒集団は統制が困難なまでに強大となった。他方、アメリカの軍艦の来訪に見られたように、宣教師の活動は圧倒的に優位にある軍事力によっても支援されていた。異教徒の首長は袋小路に追い込まれ、残された唯一の道は、彼自身が改宗することであった。こうして、スペインの統治が始まる1887年までに、5つの首長国のナンマルキのうち4人は改宗し [MH (Doane) 1887: 224]、ほとんどの島民がキリスト教徒となった³⁾。

1885年にカロリン諸島はスペインの植民地となり、1887年にはボンベイにスペイン人の官吏が着任して、島の北部にある現在のコロニアを政庁の所在地とした。知事は各首長国のナンマルキとナーニケンを村長に命じて、首長の権利を認めた。官吏と共にカソリック（カブチン派）の司祭も来島し、布教を開始した。統治のはじめから、スペイン政庁・スペイン人のカソリックの宣教師とアメリカ人のプロテスタントの宣教師は対立した [MH 1887: 389]。スペイン政庁と島民との間で2度にわたり戦争となったが、スペイン軍は島民を完全に鎮圧することはできなかった。この後、スペイン政庁は島民と友好的な関係を維持せざるをえなくなり、スペインの統治を受

3) ボンベイにおけるキリスト教に関しては、Friend や Missionary Herald の記事の他、Crawford and Crawford [1967], Hanlon [1984], Hezel [1983], O'Brien [1979] を参照。

け入れさせるために、ナンマルキに俸給を与え、プロテスタント教徒に対しても寛大な態度をとった。

スペイン政庁の支持もあって、カソリックは次第に勢力を伸ばし、1897年にはマタラニームのナンマルキを除く4人のナンマルキがカソリックに改宗し、半分以上の島民がカソリックの影響下にあった [*Friend (Nanpei) 1897: 81*]。北部のショカーン村、ネット村、ウー村のアワク地区はカソリックの地域、南部のキチー村（ただし、ウォネ地区はカソリック）、マタラニーム村、アワク以外のウー村はプロテスタントの地域となって、ポーンベイ島は宗教により二分された。1898年には、カソリック教徒とプロテスタント教徒との間で戦争になったが、スペイン軍の介入で戦闘は停止した。スペイン政庁がポーンベイ島の統治に苦慮しているうちに米西戦争が起これ、スペインは敗北する。そして、1899年にカロリン諸島はドイツに売却され、スペイン統治は終りを告げるのである。

ドイツの知事は伝統的な社会組織を尊重し、首長の権力を支持した。宗教に関しては中立の立場を採り、プロテスタントとカソリックを平等に扱った。両派の勢力範囲も固定化しつつあった。1907年、ドイツは植民地の経済発展を推進するために土地の私有化政策を採用した。土地の私有を認めるかわりに、首長たちに俸給が支払われ、島民には労役が課されることになっていた。ポーンベイ島民は、土地の所有権に大きな変化をもたらすこの土地改革案をこころよく思わなかった。けれども、土地の私有化によって利益を受けるプロテスタント教徒の指導者の影響の下で、南部地域の島民は改革案を受け入れた。北部のショカーン村民は、南部地域への対抗意識もあって、改革案に強く反対し孤立していった。1910年にショカーン村民は反乱を起こし、ドイツ人知事らを殺害した。難をまぬがれたドイツ人官吏は、他の4つの村の島民の援助を得て、政庁のあるコロニアの町の防衛にあたった。やがてニューブリテン島のラバウルから派遣された討伐隊の力で、反乱は完全に鎮圧された。島民の間での対立の延長線上に発生した反乱は、島民の間での対立を利用して鎮圧された。5つの村（首長国）に分かれていたポーンベイ島では、島民が一体となって植民地政府と対決するという状況は存在しなかった。

これまで、ポーンベイ島民は、スペインの統治下にあっても、生活を自主的に営んできた。しかし、ドイツ軍の圧倒的な軍事力によって反乱が鎮圧された後は、ポーンベイ島民は植民地政府の権威を受け入れざるをえなくなり、これに反抗することはもはや不可能となった。反乱の後、土地の私有化が実施され、土地の耕作者に地券が発行された。ドイツ政庁は、首長の権利を制限しながらも改めて公式に認めたために、

ポーンベいの伝統的な首長制度は維持されていった⁴⁾。

1914年、第1次世界大戦が勃発すると、日本はドイツ領のミクロネシアを占領した。そして、この地域は1920年に日本の委任統治領の「南洋群島」となった。日本政府は統治にあたって、これまで外国政府によってとられてきた、伝統的政治システムをできる限り利用するという政策を踏襲した。1922年に「島民村吏規定」が制定され、総村長と村長が任命された。南洋庁は原則として、伝統的な首長を村吏に任命した。ポーンベいの5村の総村長のうち、ナーンマルキでなかったのは1人だけであったという[矢内原 1935: 423-424]。日本政府も、ドイツと同じように、首長たちの権力に制限を加えながらも、彼らを統治組織の中に組み入れてその地位を保証したのであった⁵⁾。

第2次大戦後ミクロネシアはアメリカの統治の下に置かれた。1948年に、アメリカ政府はポーンベい島の5つの首長国を *municipality* とし、それぞれの *municipality* に Chief Magistrate という行政職を設け、ナーンマルキを Chief Magistrate に、ナーニケンをその補佐役に任命した。その後、Chief Magistrate は選挙で選ばれるようになったが、最初のうちは、ナーンマルキや他の高位の称号をもつ「貴族」が選ばれた。

1952年には、ポーンベい島議会が設置された。これは貴族院と衆議院とからなる二院制であった。各 *municipality* からナーンマルキ、ナーニケンを含む5人の高位の首長が貴族院の議席を占めた。衆議院の議員は選挙で選ばれた。初期のポーンベい島議会では、貴族院の活躍が目立った。1952年の議会で両院を通過した決議案のほとんどは、貴族院で最初に提案されたものであった。しかし、英語の使用や議会で討論するという新しい政治のやり方に不得手であった首長たちは次第に欠席し、貴族院は機能しなくなった [MELLER 1969: 126]。1958年に、議会が改組された時、貴族院は廃止され、選出議員のみからなる一院制となった。この結果、ポーンベい島の政治は、首長制の伝統的な政治システム、「土地の側 (*pali en sapw*)」と、アメリカの制度の下で教育を受けた新しいタイプのリーダーによる民主主義的な政治システム、「役所の側 (*pali en opis*)」とで二重に構成されるようになった。

こうした状況において、首長は、民主主義的な政治システムのリーダーに称号を与えることで、彼らを伝統的な政治システムに組み込むことを試みた。ポーンベいでは現在でも、称号と土地を持っていなければ一人前の男とは見なされない。新しいタイ

4) ポーンベいのドイツ時代については、Ehrlich [1978], Hambruch [1932-36], Hemptenstall [1978] を参照。

5) ポーンベいの日本時代については、今西 [1975], 矢内原 [1935] を参照。

ブのリーダーも、称号を獲得すれば伝統的なシステムのなかでも地位を確立することができるので、競って首長に貢納を行なっている。

現在のポーンペイの経済には、自給自足的な農業の伝統的なシステム、「土地の生活 (*mourki wahnshapw*)」と、貨幣経済の近代的なシステム、「貨幣の生活 (*mourki mwohni*)」とが存在する。そして、この2つのシステムは大きな矛盾を生ずることなく併存している。コロニアの町に住んで勤めている人が週末に農村に帰って農作業をしたり、農村に住んでいる人が町に通勤したり短期間の出かせぎに出るなど、形は様々だが、いずれも農業と賃金労働を両立させている。

首長は、祭宴を用いて貨幣経済に対応している。祭宴での伝統的な貢納品は、ヤマイモ・シャカオ(カヴァ)・ブタであるが、近年、店から購入した品物や現金も加えられるようになった。祭宴は首長が現金や富を獲得する手段ともなった。ナーンマルキは称号を乱発して、称号を「ビジネス」としているとの批判も一部にあるほどである⁶⁾。

これまで、様々な政治状況の下で、ポーンペイの首長制がいかに維持されてきたかを記述してきた。最後に、現在のポーンペイにおいて首長制とキリスト教がどのような関係にあるのか、筆者の調査地であるプロテスタント勢力の強いマタラニーム地域の事例を述べることにしよう。

アメリカ人宣教師によってキリスト教の布教が行なわれると、キリスト教の神は、ポーンペイの伝統的な神々の世界に付け加えられ、やがて伝統的な最高神の *Daukatou* にとって代わるようになった。伝統的な様々な精霊は、聖書に現れる「悪霊」とみなされることで、キリスト教の神と共存することが可能となった [WARD 1977: 274-275]。こうして、キリスト教を受容しながらも、伝統的な宗教の要素も残すことが可能となった。

人々は教会制度を、「神様が一番上、その次にイエス・キリスト、次に外国人宣教師、そして、島民の牧師、伝道師、役員」といった順序をなす位階制として考えている。そして、信徒たちは、ナーンマルキやナーニケンに対して特別の敬意を払い、彼らを牧師の上に位置づけることによって、首長制と教会制度を接合させている。こうして、ポーンペイでは、首長制とキリスト教が矛盾することなく共存しているのである。

6) ポーンペイのアメリカ時代については、Bascom [1965], Dahlquist [1974], Fisher [1974], Hughes [1970] を参照。

Ⅲ. コジャエ島の首長制と王位の継承

ポーンベイ島では5つの首長国に分かれていたのに対して、コジャエ島は島全体で1つの首長国を構成していた。そして、伝統的なコジャエ島社会は、少数の首長（「貴族」）と大多数の「平民」の2つの階層に分かれていた。

かつては18の主要な称号があり、この称号保持者が貴族を構成していた。ポーンベイでは貴族の称号はナーンマルキ系統とナーニケン系統の2つの系統に分かれていたが、コジャエの貴族の称号は1つの系統のみで構成されていた。貴族の称号をもつ首長のうち、上位9人は高位の首長であり、10番目以降は下位の首長であった [LEWIS 1967: 15; SARFERT 1919-20: 340]。

最高位の首長は「王（トコシャ, Tokosra）」と呼ばれ、コジャエの全島民に対して絶対的な権力をもっていた。王の次の位は Kanka であり、王の命令や要求を監督し、「首相」の役割を果たした。この点で、Kanka はポーンベイのナーニケンに対応するが、ナーニケンと異なり、Kanka は王の地位を継承することができた [SARFERT 1919-20: 358]。

コジャエ島は、本島と本島に付属する小さな島のレラ島とからなっていたが、首長たちは皆レラ島に住み、大きな石の壁で囲まれた屋敷の中に建てられた家に住んでいた。平民は首長の世話をする者以外はすべて本島に居住していた。コジャエのすべての土地は王の所有であった。王は若干の地域を直轄の領土としたけれども、残りのほとんどの土地は、首長に分け与えて管理させた。本島はかつて60近い字に分かれていたが、王は首長に飛び離れた領地を与えて、首長の権力が集中して強大になるのを注意深く避けた [RITTER and RITTER 1982: 113]。首長は平民から字の長を任命し、字の長は字の管理と貢納品の運搬の責任を負った [LEWIS 1967: 17]。

宣教師の Gulick は、コジャエ島民が厳しい統治者の権威に服従していたことを、以下のように述べている。

王はまさに絶大である。あらゆることについて王の言葉が法であり、あらゆる財産を王が支配している。王の下に数人の高位の首長がいて、それらの首長が土地と臣下を所有している。…支配の権利をこのように表現することは、平民が置かれている奴隷の状況を最も良く示すだろう。この高位の首長の下に、位の低い首長たちがいる。彼らは、高位の首長たちとは遠い関係で結ばれているが、高位の首長の土地の差配人以上の者ではない [O'BRIEN 1979: 178]。

ここで、「位の低い首長たち」と呼ばれているのは、平民から選ばれた字の長のことである。

王や他の首長は多くの特権を持っていた。首長だけが一夫多妻を行なうことができた。平民は首長に対して敬意を表さねばならなかった。平民は首長の前ではうずくまり、頭を下げなければならなかった。平民が首長に話す時には、低い声で敬語を用いて話した。このような表敬行動はコジャエ語で *sinak* と呼ばれた [SCHAEFER 1976: 20-21]。平民は首長だけでなく、彼らの妻や子供たちにも敬意を表した。首長の子供たちは、特に這い出すようになるまでの期間は、頭が何かに触れることのないようにと、以下のような特別の扱いを受けた。

子供は床の上に横たえてはいけない。夜も昼も、何か月間も子守や召使が腕に抱いていなければならない [WARD 1967 vol. 4: 457]。

平民たちは、土地を使用させてもらった返礼として、首長たちへ食料を貢納した。レラ島は面積が小さいので、農耕はほとんど本島で行なわれていた。字の長の指示によって、貢納は本島からレラ島へカヌーで運ばれた。首長に送られた貢納の半分は首長のもとなり、残りの半分は首長から王へと送られた。首長は平民に対し、食料の貢納だけでなく、様々な労働奉仕も要求することができた。平民は首長の家の建築やカヌーの建造を行ない、首長の催す祭宴に必要な品々も届けた。首長の間では、ポトラッチに似た祭宴の競争が時折行なわれていた。最初は1籠の食物の贈与で始まった祭宴が、相手を出し抜くために、敷物・衣類・カヌーなどの贈答も加わって、しだいに大きなものへと発展した [O'BRIEN 1979: 179-181]。

王は神聖な存在として崇められ、聖俗2つの世界の長であった。コジャエ島には様々な神や精霊がいたが、そのなかで一番重要な神は *Sinlaka* というパンノキと台風を司どる女神であり、英語では *Blue Skin* とも呼ばれていた。この *Sinlaka* は王を輩出した *Ton* 氏族の神であり、王は神と特別な関係を持つといわれていた。本島にはこの神を祭祀する場所があり、王によって平民から司祭者が選ばれていた。この聖域には王と司祭者のみが立ち入ることができた。*Sinlaka* の司祭者は王が即位する時に重要な役割を果たした。司祭者は、聖域で祭祀を行なったあと、レラ島での即位式において王と王妃の頭に花輪をかぶせ、王の称号を宣言した [LEWIS 1967: 21; O'BRIEN 1979: 200-201]。

パンノキの収穫時には、司祭者が *Sinlaka* の聖域に出向いて祭祀をとり行なった。

また、年に1度か2度、何か異常なことが起こった時にも、Sinlakaをなだめるために儀礼が行なわれた。司祭者は、人々を従え行列を作って首長の家々を回り、神への供物を集めた。供物はふつう、白い樹皮布と島でとれた品であった。人々は体に椰子油を塗り、花輪を頭に載せた。司祭者は法螺貝を吹いて恐ろしい音を出し、人々は悲しそうな鳴き声をあげて行列に加わった。集められた供物は山の中の神の社へ供えられた [JONES 1861: 131]。

コジャエには4つの母系の氏族があった。それらは、Ton, Penme, Lishne, Neasであった。氏族の間には序列があったが、この順序については、西洋との接触が始まった時期にコジャエを訪れた外国人の報告は、必ずしも一致していない。例えば、1824年に島を訪れたDuperreyは、Tonが最高位の氏族としているが [RITTER and RITTER 1982: 16]、1827年に訪れたLutkeは、王はTon氏族の者だが、重要で裕福な首長のほとんどはPenme氏族の者だと述べている [RITTER and RITTER 1982: 113]。しかし、これらの19世紀のはじめの報告は、TonとPenmeの2つの氏族が上位を占めていたということと、その次にLishne氏族が位置し、Neas氏族は最下位を占めたという点では一致している。19世紀のはじめには、首長は上位2つの氏族から出ている。Lutkeも、レラ島の主要な首長には3番目のLishne氏族の者はおらず、Lishne氏族の者は字の長に限られると述べている [RITTER and RITTER 1982: 113]。Neas氏族の者は首長になれなかった。氏族は外婚の単位であったと考えられている。また、氏族は亜氏族（サブ・クラン）に分かれ、亜氏族の間にも序列があった [O'BRIEN 1979: 183-184]。

かつて、王位はTon氏族員が世襲的に継承したと考えられているが [PEOPLES 1985: 34]、その後、この原則がくずれて他の氏族員も王位に就くようになって、継承の形態は複雑になっていく。このことは、IVで述べる人口減少の問題や、Vで述べるキリスト教の浸透の問題と密接な関係をもつものである。以下では、Sarfert [1919-20: 378-387] の記述にもとづいて、コジャエの王位の継承がどのように行なわれてきたのかを見ることにしよう（表1、図1を参照）。

コジャエの王について系譜関係がはっきりとわかるのは、1800年頃王位に就いていたAwane Sa王（Ton氏族）からであるが、この王の在位期間中、兄弟である2人の首長が本島に行った時にMatante地域の人々に襲われ、兄弟の1人のSipaが殺された。Sipaの一族は直ちに復讐することはせず、機会をうかがっていた。

Awane Sa王の死後、殺されたSipaの息子たち（Ton氏族）が次々と王位に就いた。Sipaには5人の息子がいた。長男は残忍であったので、首長たちの反対にあって王

表1 コンチャエの歴代の王

在位の期間	王の名	出身氏族	キリスト教に対する態度
1800年頃	1. Awane Sa	Ton	
	2. Awane Likiak	Ton	
	3. Awane Na	Ton	
	4. Awane Salik I	Ton	
	5. Awane Sru I	Ton	
1835年頃 ～1837年頃	6. Awane Sru II	Penme	好意的だが、改宗しなかった。 キリスト教に反対。 キリスト教に反対。 キリスト教に反対だが、教会の建設には協力。信徒の土地を奪った直後に死亡。 キリスト教に反対だが、礼拝堂建設に協力。王の地位から追放される。 信徒。平民の土地を教会に与えたことで王位を剝奪される。 信徒。 信徒。 キリスト教に反対だったが、1905年に改宗。 信徒で執事。王位を廃止した後、牧師に。1957年死亡。
1837年頃 ～1854	7. Awane Lepalik I (Good King George)	Penme	
1854-1856	8. Awane Sru III	Ton	
1856-1858	9. Awane Oa	Penme	
1858-1863	10. Awane Lepalik II	Penme	
1863-1874	11. Awane Salik II	Penme	
1874-1880	12. Awane Sru IV	Penme	
1880-1888	13. Awane Sru V	Lishne	
1890	14. Awane Lepalik III	Penme	
1890-1910	15. Awane Sa II	Lishne	
1910-1947	16. Awane Na (King John)	Lishne	

Schaefer [1976: 47] と O'Brien [1979: 187] より作成。

位に就けなかったが、残りの4人の兄弟が次々と王位に就いた(2代から5代)。この4人の兄弟による統治の初期に、殺された父親の報復が行なわれた。これが契機となって紛争は拡大した。本島の南部と西部の人々は Matante 地域の人々に加勢し、北部と東部の人々は王を支援して両軍が戦ったが、王の軍勢が相手を打ち破った。

兄弟の最後の王、Awane Sru I が死亡した時、Ton 氏族には王の後継者がいなかった。そこで、首長たちの反対にも拘らず、王の息子の Awane Sru II が王位に就いた。首長たちは Awane Sru II の姉妹の息子の Selik を王位に就かせようとしていた。この6代目の Awane Sru II は Penme 氏族出身の最初の王である(この後、14代目まで2人を除き Penme 氏族の者が王位に就く)。この王は残忍で思慮がなく、多くの島民を殺したといわれている。王が Selik の土地をとりあげようとしたので、Selik と彼の兄弟たちが王に対して反乱を起こした。本島の島民も2つに分かれて戦った。反乱軍は勝利し、王位は剝奪された。しかし、この戦いで Selik は死亡したので、首長たちは Selik の弟を王に選んだ。これが7代目の Awane Lepalik I である。

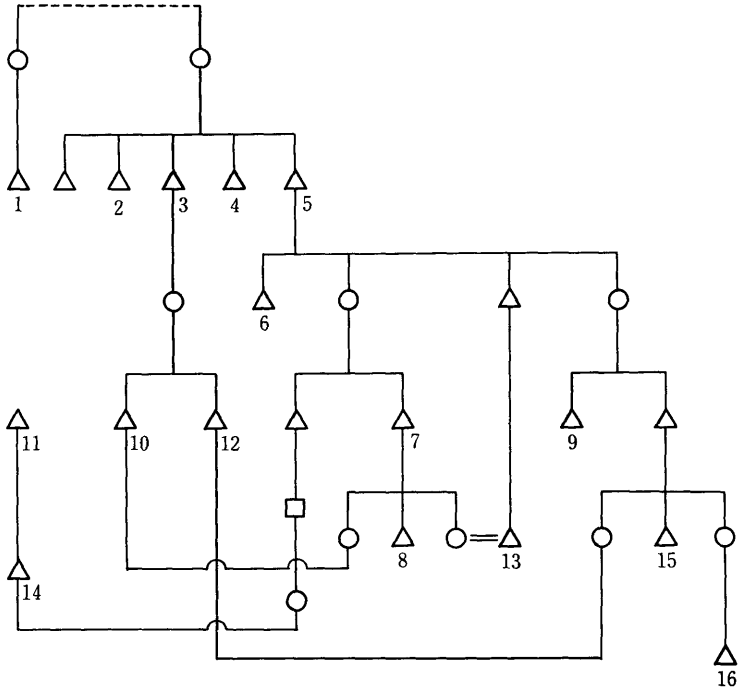


図 1 王位の継承

Sarfert [1919-20: 378-387] の記述により作成。

Awane Lepalik I は自分の一族を高位の首長に任命した。彼は外国人に対して友好的であったので、外国人から Good King George と呼ばれた。島民も彼を名君として尊敬した。King George は1854年に死亡した。王の兄弟は皆死亡していたので、長男が次の王となった (Awane Sru III, Ton 氏族)。Awane Sru III には精神病を患っていた娘しかおらず、彼の兄弟たちも既に死亡していたか、まだ幼かった。それで Awane Sru III の死後は、King George のイトコ (母の妹の息子) の Sesa が王となった (Awane Oa)。

9代目の王の Awane Oa が死亡した時、近親者の中に王となりうる者はいなかった。それで、3代目の Awane Na 王の娘の息子が王位に就いた。彼は King George の娘婿でもあり、Awane Lepalik II と名乗った。

この Awane Lepalik II の死後、11代目の王となったのは Awane Salik II である。彼は王族一家とは妻を介して遠い親戚関係にあるだけであったが、首長たちや人々の反対を押しきって王位に就いた。この王は臣下から金を奪ったりしたので、人々には不評であった。1869年には王・首長と平民とからなる評議会が結成され、1874年11月に

は、評議会は王を退位させて、先代の Awane Lepalik II の弟を新しい王 (Awane Sru IV) に選んだ。

12代目の Awane Sru IV は前の王と異なり教会に好意的であったが、教会に提供するために島民の土地をとりあげたことが原因で、王位を追われた。そして人々は Awane Sru V を新しい王に選んだ。

13代目の Awane Sru V は King George のイトコ (母の兄弟の息子) であり、娘婿でもあった。彼は Lishne 氏族から出た最初の王であった。Awane Sru V が死亡した後、人々は Sesa に王位に就くように要請した。Sesa の妻は King George の直系の子孫であった。Sesa はこれを断わった。14代目の王になったのは、11代目の Awane Salik II の息子であった。彼の妻は King George の兄の孫であった。この Awane Lepalik III はすぐに死亡した。再び Sesa に王位に就くようにとの人々からの要請があったが、この時も Sesa は断わった。王の近親者には王にふさわしい者がいなかったため、ホノルルにいた Awane Sa II が島に呼び戻され、15代目の王となった。彼は9代目の Awane Oa の甥 (兄弟の息子) であり、姉妹が12代目の Awane Sru IV の妻であったので Awane Sru IV とは義理の兄弟の関係にあった。Awane Sa II の後には甥 (姉妹の息子) の Awane Na が王位に就いた。

以上が Sarfert の記述にもとづく王位の継承の実態である。King John とも呼ばれた Awane Na は、1947年に王位の廃止を宣言し、これによりコシャエの首長制は消滅した。

これまでの記述から、王位の継承は6代目の Awane Sru II 以降、母系というルールが放棄され、王の近親者が王位に就くようになったことがわかる。このため、王位の継承は流動的となり、Penme 氏族や Lishne 氏族から王を輩出するようになった。

1861年頃、宣教師の Snow は、王位の継承について以下のように述べている。

この地位 [王位] は世襲ではない。必ずしも死亡した王と同じ部族 [氏族] の近親者から選ばれるという訳ではないが、それでも王の死期が迫ると、王位のためにアメリカの政治家が [政治上の] 協力 (log-rolling) と呼ぶものがしきりに行なわれる。あらゆる手をつくした後に、人々の意向が強ければ別の部族の首長が王位に就くことがある。

王位の継承の方向は明確に定まっている訳ではないが、前の王の息子が父の跡を継いだり、王の兄弟姉妹の息子が継ぐこともある [WARD 1967 vol. 4: 455-456]。

つまり、母系の継承の方式が機能しなくなると、王の近親者で、首長たちの (後に

は一般の人々の) 支持を受けた者が、王位に就くようになった。6代目の Awane Sru IIや11代目の Awane Salik IIのように、他の首長たちの意向を無視して実力で王位に就く者もあらわれたが、いずれも後に王位を追われている。

上記のような王位の継承規則の変化は、首長制の動揺を示すものである。何故、このような変化が生じたのか。以下の2章では、この点を論じることにする。

Ⅳ. 人口減少とコジャエ島の首長制

1804年12月、ボストンの捕鯨船 Nancy 号がコジャエを発見した。Nancy 号は島に寄港しなかったが、船長はマサチューセッツ州知事の名前をとって Strong 島と名づけ、その後、コジャエ島はこの名前で知られるようになる [WARD 1967 vol. 3: 534-538]。

1824年の6月、Duperrey 船長の率いるフランスの探検船 Coquille 号がコジャエを訪れ、本島の北部の Okaht 港に入港して10日間ほど滞在した。島民たちは、白人におっかなびっくり近づいて来て、白人の肌をこすって白い顔料を塗っているのではないかと確かめようとした。また、白人が帽子や靴や上着を脱ぐと非常に驚いた。島民はそれらを体の一部と思っていたらしい。釣針を与えても耳飾りとするし、鉄の斧を使った島民は、切れすぎるといって返してよこした。島民は豚も知らなかった。こうしたことから、Coquille 号のフランス人たちは、コジャエ島の人々はこれまで西洋人を見たことがないのだろうと判断した。島民は女性を西洋人に接触させないようにし、停泊地の近くに住む女性たちを島の奥地に隠してしまった [RITTER and RITTER 1982: 26-27, 47, 51, 57]。

この船に乗り組んでいた3人のフランス人は、当時のコジャエの人口を以下のように報告している。船長の Duperry は2,000人と推定し [RITTER and RITTER 1982: 16], Dumont d'Urville は「せいぜい、2,000人から3,000人」と考えた [RITTER and RITTER 1982: 33]。また、Lesson は他の2人よりもずっと少なく1,200人と推定して、以下のように述べている。

一般的に言って、コジャエ島には僅かな人口しかいない。どうして人口がこんなに低く抑えられているのか、私にはその原因を明らかにすることができない。首長の死に際して子供のいけにえを命ずる悪い制度のためだろうか、それとも、この地域は健康に良くないからなのだろうか。我々は多くの男女の老人に会ったのだから、後者の推測はあてはまりそ

うもない。レラの大きな村は、全島で最も人が集中している所で、500人～600人の人口がある。島の他の地域では、3、4軒の小屋が固まって、あるいは1軒の家だけで、砂浜の端や内陸の谷に点在しているだけだ。全体の人口を多くて1,200人だと推測しても、真実からそれほど掛け離れてはいないだろう [RITTER and RITTER 1982: 61]。

1827年の12月から翌年の1月にかけて、ロシアの探検船 *Senyavin* 号がやはり *Okah* 港に寄港して、1か月ほど滞在した。数年前の *Coquille* 号の時と比べて、島民の西洋人に対する対応はずいぶん変わっていた。島民は鉄の斧を手に入れようと熱心であったし、明らかに売春をさせる目的で女性を船に連れてきた [RITTER and RITTER 1982: 95, 183]。

この時、*Lutke* は1人の島民から各地域別に人口を聞き出し、首長を除く平民に関してかなり詳しい人口の集計を試みた。彼はこれにもとづいて全島の成人人口を800人と推定し、さらに、子供の数はかなり多いと述べている [RITTER and RITTER 1982: 111]。

コジャエ島の人口の変化を研究した人類学者の *Ritter* は、*Lutke* の人口集計を検討して誤差を修正し、子供の人口を推測して加えて、西洋との接触が始まった当時の人口を約3,000人と推定している [RITTER 1981]。3,000人という人口は、コジャエ島の面積を考えるとかなり低い数字である。ほぼ同じ面積のヤップ島が西洋と接触した時の人口が、40,000人と推定されているからである。

なお、フランスやロシアの探検船がコジャエを訪れた時の王は、4代目の *Awane Salik I* であった。王は既に相当の老齢であったという。

西洋との接触が始まった頃のコジャエ島の人口が少ない理由は、台風と戦争であると *Ritter* は言っている。18世紀の終り頃、激しい台風がコジャエ島を襲ったといわれている。1837年頃より1854年まで王位にあった *King George* は、自分がまだほんの子供だった頃、島の人口は多く、何千人もの人々が丘の上にも住んでいたと語り [O'BRIEN 1979: 208]、台風によって人口が減少したことを宣教師の *Gulick* に話している。

彼ら [コジャエ島民] の家々は吹き飛び、彼らのパンノキや椰子の木も倒された。この結果、飢餓が起り、何千人もの人々の命が奪われた。地下に保存されていたパンノキの実もまもなく食べつくし、生き残った者は魚で命を繋いだ。一時に20人もの人々が死亡したり死にかけていた家がいくつもあった、と彼 [王] は言った [GULICK 1932: 76]。

王が述べたことには多少の誇張があるかもしれないが、20世紀のはじめに人類学の調査を行なった Sarfert も、台風の後、生き残った者は野生の食物をとって生きのびたという伝承を記録しており [SARFERT 1919-20: 26]、台風がコシャエ島の人口に大きな影響を与えたことは確かであると思われる。このような飢饉においては、子供に対する影響が大きく、その後の出生率も低下したことが推測される。この結果、台風は多くの犠牲者を出しただけにとどまらず、その後も長い間、人口減少を継続させたと考えられる。

西洋との接触以前に人口が減少したもう1つの理由として Ritter が挙げているのは、内戦である。既述のように、19世紀のはじめに平民の反乱が起これ、これは全島の住民を巻き込んだ。反乱軍は鎮圧され、多くの者が死亡した。Ritter は、こうした紛争がしばしば発生したかもしれないと推測している [RITTER 1981: 25]。このように、コシャエ島の人口は西洋との接触以前において、既に減少しつつあったと思われるのである。

Senyavin 号の寄港のあと、捕鯨船の寄港が始まる。それと同時に、船から逃れた船員たちがコシャエ島にも住みつくようになった。1830年にはイギリスの捕鯨船 John Bull 号が寄港したが、乗組員のうち10人が島に残ったという。2年後に訪れた別の捕鯨船からも、ほぼ同数の乗組員が逃亡した。ポーンペイと同じように、コシャエでもビーチコーマーの人口は増え、1835年までに「島には30人を下らない逃亡船員」がいた [HEZEL 1983: 113]。

ところが、1835年に島民が寄港した2隻の船を襲撃するという事件が起これ、1842年にも島民は捕鯨船を襲った。この3件の襲撃で多くの外国人が殺された。この後、島民は外国人が島に滞在することを望まず、1840年代の半ば頃までにコシャエにビーチコーマーはほとんどいなくなった。1850年代に捕鯨業は最盛期を迎え、コシャエにも多くの捕鯨船が寄港した。船から脱走する船乗りはあとを断たなかったが、彼らの島での滞在は短期間であり、多くの場合、次に寄港した別の船に乗って島を去った [HEZEL 1983: 117-118]。1857年には、島にいた白人の交易業者が、王を追い出して島を乗っ取る陰謀を企てているのが発覚し、家に立てこもった白人を島民が包囲するという事件が起これた。1852年より布教活動に従事していた宣教師の仲裁もあって、白人が島を去ることで事態は解決したが、王は今後宣教師以外の外国人が島に住むことを禁じた [HEZEL 1983: 164-165]。

1840年代に島を訪れた船乗りたちは、王を始めとして島民が英語を上手に話すことに一様に驚いている [WARD 1967 vol. 3: 569]。宣教師の Snow は島民の英語の能力

に感銘を受けて、布教活動の初期には、聖書をコジャエ語に翻訳するよりも、英語で聖書やキリスト教の真理を教えようと考えたほどであった [O'BRIEN 1979: 228]。

ポーンペイ島では、多数のビーチコーマーが住んでいて、外国船との交易は、首長の庇護下にあるビーチコーマーの手で営まれていた。これに対して、コジャエ島民は、外国人の居住を嫌い、自ら英語を操って交易にあたった。外国船との接触はすべて王や首長が統制していた。寄港した船は、水や薪や食糧を島民から手に入れ、西洋の品物で支払いをしたが、購入のすべては王と首長を介して行なわれた。王は島民に薪・水の補給や船の修理の手伝いをさせた。さらに、船員に女性を提供することも、王の統制の下に行なわれていた [O'BRIEN 1979: 230]。

捕鯨船はコジャエに様々な西洋の品をもたらししたが、多くの病気ももたらした。このために、コジャエの人口は著しく減少した。宣教師によって初めて人口センサスがとられたのは1855年であるが、この時の島の人口は僅かに1,106人であった [O'BRIEN 1979: 206]。最初の西洋との接触が始まった1828年から1855年までの期間の人口は、1828年の人口を Ritter の推測したように3,000人とすれば、ほぼ3分の1に減少したことになり、Duperrey が示した2,000人であったとしても、ほぼ半分に減少したことになる。

この急激な人口減少が1828年から1855年の期間のいつから生じたかについては、はっきりとはわからない。しかしながら、1848年には、コジャエ島の人口減少は既に明白であった。この年の1月に寄港した捕鯨船の船長の Jackson は以下のように記している。

知りうる限りでは、2つの島 [レラ島と本島] には1,200人から1,500人ほどの住民がいるようだ。しかしながら、私にはそれを確かめる機会がなかった。彼らはみじめな状態にある。病気、一種の熱病が、蔓延している。さらに、淫らな病気 [性病] やその他の病気も人々の間に広がっていた。毎日、何人かの人が死んでおり、なんらかの処置が施されない限り、数年の間にすべての住民が消滅してしまうにちがいない [RITTER 1981: 21]。

1850年に島を訪れた Caloft 船長も、人口が減少しつつあることを認めている。彼は人口を1,500人と推定し、「風邪、結核、その他の病気のために、人口は現在減少しつつある」 [WARD 1967 vol. 3: 578] と報告している。宣教師の Snow は、1852年からコジャエ島での布教を開始したが、1853年の島の状況を以下のように述べている。

死はこれらの人々の間で猛烈な仕事をなすとげた。生きながらえた少数の貴族が、彼らの昔の栄光と偉業を我々に語ってくれるだけだ。そして、我々はこれらの人々のために、直ちに仕事を行わなければならない。彼らは急速に滅りつつあるからだ。死者の占めていた地位を継ぐ者は、僅かしかない [O'BRIEN 1979: 204]。

そして1856年には、Snow は、10年以内に最後のコシャエ島民の葬儀を行なうことになるだろうと書いている [SARFERT 1919-20: 57]。

前述のように、Snow は1855年に初めて人口調査を実施したが、彼はその後も1858年まで、毎年継続して行なっている。これによれば、1855年に1,106人であった人口は、1858年には747人となり、32%も減少している。この人口減少はその後もずっと続き、1874年には397人、1881年には365人となる。人口の減少は1880年代に入ってやっと停止し、その後は増加に転じた [O'BRIEN 1979: 206] (図2を参照)。

このような著しい人口減少をもたらした原因として、宣教師は性病を挙げている。例えば、Snow は次のように述べている。

原住民たちに最初に性病をもたらした船と船乗りのことを、王は何度も私に話してくれた。…それ以前は原住民の間には病気はほとんど知られていなかった。ほとんどの人々にとっ

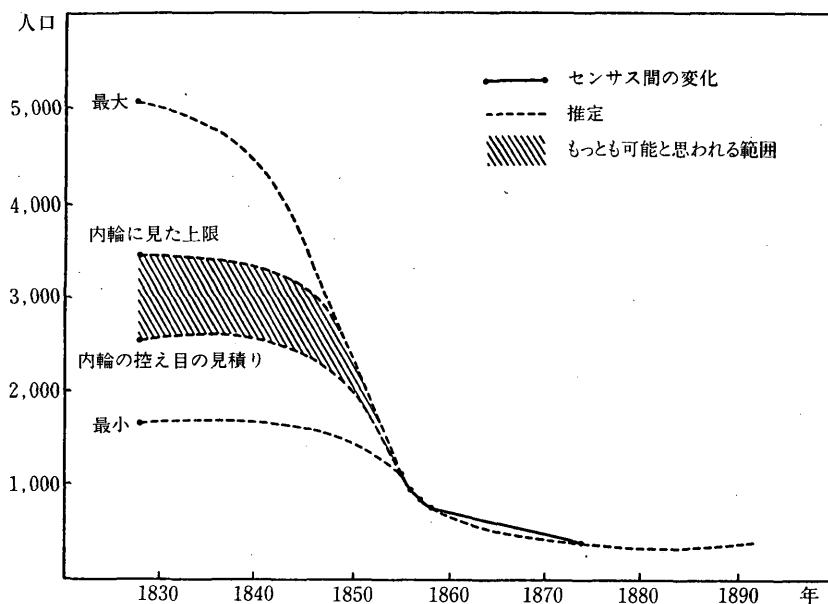


図2 1828-1890年のコシャエにおける推定による人口の変化 [RITTER 1981: 23]

て、老齡のみが永遠の世界へと旅立つ理由であった。しかし、今では、老人と子供は稀にしか見られない [O'BRIEN 1979: 211]。

Snow の1855年の人口調査によると、人口1,106人のうち、男子は642人、女子は464人であり、女性が人口に占める割合は約42%であった。Snow は、このように女性の人口が少ないことは、男性よりも女性の間で病気が広まったためであるとして、これを、性病によって人口が減少したという彼の主張の根拠としている [O'BRIEN 1979: 211-212, 218]。

性病は寄港した外国船の船乗りとの売春行為によって感染したものであるが、ピューリタンの性格を持つアメリカン・ボードの宣教師たちは、常にこうした不道徳的な行為には激しく反対していた [O'BRIEN 1979: 212]。このため、宣教師には、人口減少の原因として性病を強調しすぎる傾向があったことに注意しなければならない。さらに、性病、特に梅毒の症状は、インド痘の症状に良く似ていて、素人には判断できないこともあるといわれている [RITTER 1978: 55]。

コジャエ島の人口減少は、1つの病気だけで引き起こされたのではなく、他にもいくつかの病気が関与していたと思われる。なかでも、インフルエンザが人口減少に与えた影響は大きいと考えられている。1855年の1月頃にはインフルエンザが猛威をふるい、113人が死亡し、86人が病気で苦しんでいた [LEWIS 1967: 30]。また、翌年の10月にもインフルエンザが再び流行し、この時も多くの死者を出し、ある1つの字だけで5人の子供が死亡したという [O'BRIEN 1979: 214]。Sarfert も、人口減少には梅毒よりも「咳」の方が影響が大きかった、と島民が語ったことを記録している [SARFERT 1919-20: 52]。

コジャエ島の人口の変化をもう少し詳しく検討してみよう。そして、大人と子供の割合の変化に注目しよう (表2を参照)。「子供」の定義は、1855年と1874年については示されておらず、1861年では10才未満、1905年では15才以下とされていて基準が一定していないので、正確に状況を把握するのは困難であるが、大まかな傾向を伺うことはできるであろう。まず、1861年には、大人が約90%、子供が約10%で、極端に子供の割合が低くなっているのが特に目につく。これは、この年の統計では10才未満の者を子供としていることにも、ある程度は起因しているであろう。しかしながら、前述のように1855年と56年にはインフルエンザの流行があって、1855年にSnow が人口調査をした時に、赤ん坊の数は僅かに1人であったと報告されており [SARFERT 1919-20: 55]、小さな子供はほとんどいない状況であったので教会の学校は閉鎖された

表2 コジャエ島の人口

年	合計	男	女	大人			子供		
				計	男	女	計	男	女
1855年	1,106	642	464	867	499	363	239	143	96
1861年1月 ⁽¹⁾	748	448	300	669	411	258	79	37	42
1874年10月	397	237	160	282	175	107	115	62	53
1905年 ⁽²⁾	516	271	245	296	159	137	220	112	108

(1) 1861年の子供は10才未満の者である。

(2) 1905年の子供は15才以下の者である。

Sarfert [1919-20: 55] と O'Brien [1979: 218] より作成。

[O'BRIEN 1979: 215-216]ということからも、この時期に幼児の人口が極端に少なかったことは明らかであろう。

宣教師の Snow は、1858年のはじめには「これまでのいかなる時よりも多くの子供が島にいる」と述べ、1859年の1月には、1年間に16人から20人の子供が生まれ半分は生き残ったと報告し、1860年7月には、「子供の数が、ゆっくりとではあるが、ずっと増加していくのを見るのは、とても元気づけられる」と記している [O'BRIEN 1979: 216; MH 1860: 37]。こうした記述から、1858年頃より出生率は徐々に増加へと転じたことが推測され、1861年の統計は、出生率がやっと上昇しはじめた段階を示すものとして理解することができる。

しかしながら、一度激減した出生率は、その後も長い期間、全体の人口構成に影響を与え続けた。これらの子供が成長して子供を産める年になっても、この年代の人間の絶対数が少ないので、全体の人口はなかなか増加しないからである。前述のように、コジャエの人口は、1880年代に最低に達して、その後は増加し続けた。それは、1858年頃より増加した子供たちが出産する年代に達したからである。

このような人口減少はコジャエ島の首長制度に深刻な影響を与えた。前述のように、2代目から5代目まで4人の兄弟が次々と王位を継承しおわると、Ton 氏族には王の後継者はもはや見当たらなかった。Lutke は1827年に11人の首長がいたと報告しているが、Ton 氏族は王ともう1人の首長を出しただけで、8人の首長は Penme 氏族の者であり、1人が Lishne 氏族の者であったという [RITTER and RITTER 1982: 113]。Sarfert は、1850年頃には King George の妻と子供のみが、Ton 氏族の Ton Yewal という亜氏族(サブ・クラン)の生存する成員のすべてであったという [SARFERT 1919-20: 344]。このため、その後は、Penme 氏族から王を輩出するようになっていった。しかし、この Penme 氏族でも王の候補者を選出することが次第に困難となり、つい

表3 貴族の数（王を含む）

年	人数	出典
1827年	11人	Ritter and Ritter 1982: 113
〃	12人	Ritter and Ritter 1982: 171
1853年	11人	O'Brien 1979: 186
1869年	8人	Sarfert 1919-20: 388
1880年	6人	Sarfert 1919-20: 388
1910年	4人	Sarfert 1919-20: 338, 388

に1880年には、3番目の地位にあった Lishne 氏族から王を出すようになった。さらに、この Lishne 氏族においても王位の継承者を見出すのが困難となり、15代目の Awane Sa II は長年暮らしていたハワイから呼び戻されて、1890年に王位に就いたのである。

王位の継承は、元來世襲的なものであったが、人口減少によって後継者を見つけることが困難となると、選択の要素がもちこまれるようになった。王となるためには、そして王であり続けるためには、人々の支持が必要となった。このような王位の継承規則の変更は、王位をめざす者間での競合性を増加させるとともに、王の地位を不安定なものとした。そして、王の神格的な性格もそれにより弱められた。

コシャエでは、王位の継承者だけではなく、首長の位の継承者も不足をきたしていた。伝統的には王の位を含めて18の首長の位が存在していたというが、1827年の時点で首長は11人だけで、既に7人の欠員が生じていた。その後も首長の数は減少を続け、1910年には4人にまで減少した（表3を参照）。

王や首長の位を継ぐ者がいなかったということは、貴族階層の間での人口減少が特に激しかったことを示すものであろう。貴族階層の人々が小さなレラ島に集中して住んでおり、レラ島の港に外国船の寄港が多かったために、首長たちが外国人船員のもたらした病気にかかる割合が高かったためと思われる。首長制度は、後に廃止されることになるのだが、それに至るまで長期間にわたって、不完全な形でしか機能していなかったのである。

平民の死者も多く、住民のほとんどが死亡したために放棄されてしまった字もいくつもあった。平民の貢納も減少し、首長制度を支えていた経済的基盤は大きく揺らいだ。そして、僅かな人数の平民では、首長制度を支えることは困難となっていったのである。

V. コシャエ島における首長制から教会への移行

ここでは、コシャエの首長制の変化を、キリスト教の発展との関連において考察する。

キリスト教の布教をポーンペイ島において開始したアメリカン・ボードは、コジャエ島においても、同時に布教活動に乗り出した。1852年8月にコジャエ島を訪れたアメリカン・ボードの一行は、King George と会って宣教師を受け入れるかどうかを打診した [HEZEL 1983: 158]。

ビーチコーマーが、宣教師の滞在を許せば、宣教師が島を乗っ取り、あらゆるものを宣教師に与えなければならなくなるという噂を流していたので、島民は宣教師に疑いの目を向けていた [JONES 1861: 250]。しかし、善良な船乗りは、島民の質問に対して、教育や医療など宣教師が島民にもたらす利点を説明し、宣教師を受け入れるように勧めていた [HALEY 1948: 168-169]。王の息子は、「悪い船長は私に宣教師を悪いと言い、良い船長は宣教師を良いと言っている」と述べた [MH (Gulick) 1853: 86]。

王は、宣教師に王の権力に干渉しないことを望んだ。宣教師は、自分たちは島を支配するためにやって来たのではなく聖書を教えるために来たのだと述べ、キリスト教と世俗の権力とは矛盾しないことを説いた [MH 1853: 86-87]。

King George は宣教師を島に受け入れることを認めた。宣教師の Benjamin Snow 夫妻とハワイ人助手の Daniel Opunui 夫妻が、コジャエ島での布教にあたることになった。王は宣教師の活動に全面的な支援を与えた。王は宣教師のために、土地を与え、家を立てた [MH 1853: 85]。さらに、10才になる自分の息子を Snow の家に住まわせた [HEZEL 1983: 159]。

当初、Snow は、青年層への布教を通じて改宗を計るという長期的な計画の下に、活動を進めた。

彼 [Snow] は、原住民の伝統的な慣習に干渉することは一切考えておらず、青年層にこれらの慣習がいかに愚かであるかを示して、彼らが活躍する時に、異教の儀礼を廃止するようになることを意図していたのである [JONES 1861: 253]。

日曜日の礼拝には、王も出席し、百人以上の島民も列席した。そして、Snow は祝禱を行なうために全員の起立を求めた。首長の前では常に身を低くして敬意を払うことが慣習となっていた島民にとって、王の面前で起立することは大変なことであった。王が臣下に宣教師の言葉に従うように言ったので、人々はやっと立ちあがった。やがて、最初の物珍しさが薄れてくると、礼拝への出席者は減少していった。王が欠席者に労役を命じたところ、出席者はすぐに増加した [HEZEL 1983: 159]。

このように、王は宣教師の布教活動に協力的であり、椰子酒を造ることや、他の種類の酒を飲むことを禁じた。しかしながら、王自身はしばしば酒を飲み、酒臭い息を吐きながら教会にやって来たりもした。さらにまた、王は寄港した船からの依頼に応じて、女性を提供していた。Snow はこれに反対して、王に売春を禁止させた。しかし、売春はその後も隠れて行なわれた。Snow がこのことを王に咎めると、王は自分も止めさせたいと思っているのだが、船長の依頼を断わるのはとても難しいと答え、「カナカ [太平洋諸島民の俗称] は白人とは違って、どうやってノーと言うか分からない」と言った [HEZEL 1983: 160]。

王の支持を受けて、布教活動は表面的には順調に進んだ。日曜日の礼拝には多くの島民が集まった。礼拝に出たいのだが、教会に着て行くのにふさわしい衣服がないために、止むなく欠席した女性たちもいた。Snow の開いた学校でも、多くの生徒が英語の読み書きを習っていた。熱心な生徒は、学校に来ない子供たちに、砂浜に棒で文字を書いて教えていた。布教を開始した年の終りにハワイ人の Opunui が急死した時にも、王から臣下に至るまで、島民は皆深い同情を寄せたのであった [HEZEL 1983: 160-161]。王はキリスト教に関心を抱き、「古い迷信の多くがすたれ、ほとんど忘れ去られていくのも構わなかった」 [LEWIS 1967: 78] けれども、改宗をするまでには至らなかった。

1854年の9月に King George は死亡した。King George の後継者として2人の人物が候補にのぼっていた。1人は王のイトコの Sesa であったが、彼は宣教師の追放を公言していた。彼は王の領地であった土地を力づくで奪い、首長たちに自分を王に選出するように圧力をかけた。もう1人の候補者は王の長男の Kanka であった。Snow は、王の葬式に集まった首長たちに、Sesa を新しい王に選べば、自分は島を去ると述べた。2か月間の論議のあとで、人々は Kanka を王に選出した [HEZEL 1983: 161-162; O'BRIEN 1979: 240-242]。

Snow の後押しによって王位に就いた Kanka だが、彼は酒に溺れ、船を訪れては酒をねだっていた。王が布教活動に干渉したり妨害したりすることはなかったけれども、王の強力な支持がなくなると、島民のキリスト教への熱意は冷めていった。礼拝や学校への出席は急激に減少した。迷信が再び盛んとなった。1855年には学校も閉鎖せざるをえなくなった [O'BRIEN 1979: 242-244]。

これまで、布教活動はレラ島でのみ行なわれていた。1856年に Snow は、初めて本島に布教に出かけたが、島民の反対にあった。女神 Sinlaka の司祭者たちは本島を本拠としていたので、宣教師が活動の本島にまで拡大したことに対して怒った。司祭者

たちは、教会の礼拝に出席すれば直ちに罰を受けるだろうと予言し、どうしても宣教師の説教を聞きたいと思う者は、本島を去ってレラ島に住めと命じた。Snow の布教のために家を提供した男が、釣をしていて怪我をした。このことを、司祭者たちが Sinlaka の怒りの印だと述べたので、礼拝に集まる島民はほとんどいなくなってしまった。Snow は、本島での布教活動をあきらめ、レラ島だけで布教に従事した [HEZEL 1983: 163-164]。

1855年にはインフルエンザが流行し、翌年の56年にもまたインフルエンザが広がって、多くの人々が死んでいった。島民は、自分たちはやがて全滅してしまうのではないかという深い絶望にとらわれていった。こうした状況において、首長たちは伝統的な宗教に熱心になり、伝統的宗教が復活して盛んになった [HEZEL 1983: 164]。

1856年には王が急死して、2年前に Snow が王位に就くのを阻止した Sesa が新しい王 (Awane Oa) に選出された。伝統的宗教は首長たちの支持を受けて復活していったけれども、キリスト教の教えも島民の間に浸透していった。1858年の5月には、平民の Keduca という名の男と彼の妻の2人が、初めて信徒として教会に迎え入れられた。翌年の59年にも、さらに2人が信徒となった。島民信徒は本島で布教活動を行なったが、数年前とは異なり、本島でも島民のキリスト教に対する関心は高まっていた [HEZEL 1983: 164-166]。

しかしながら、信徒の中に、キリスト教の罪を犯す者が何人か現れるようになった。1959年、Snow は島民にはきびしい懲戒の手段が必要だと考えて、教えに背いた者に犯した罪を教会の会衆の前で告白させた。

私 [Snow] は真相を詳細に記した告白を準備した。私が日曜日に会衆に向かってそれを読みあげている間、彼ら [罪を犯した信徒たち] は起立し、陳述が正しいことを声に出して認めた。…このことによって、訓示するだけではなかなか学べない、福音が要求することを、人々に教えることができたのである [O'BRIEN 1979: 253]。

この公開の告白という慣習 (罪の許しを神に求めるのではなく教会員に求める [SCHAEFER 1976: 222-223]) は、この後、コジャエの教会の非常に重要な特徴となり、現在に至るまで続いている。

宣教師の Snow は、1862年にコジャエ島を去るが、Snow の滞在の最後の数年間は、島民のキリスト教に対する関心が高まった。以前には布教活動を行なうことが不可能であった本島でも、キリスト教の教えを受け入れようとする人々が現れたし、レラ島

での礼拝に集まる人々も以前よりも増えていた。しかし、その一方で、異教の復活も著しく、それは Snow がコジャエ島に来て以来初めて見るほどであった。キリスト教の神に対する信仰も、伝統的な神である Sinlaka に対する信仰も、共に盛んになったのである [O'BRIEN 1979: 254]。

島のある「有力者」のことを、Snow は以下のように書き留めている。

彼は「神」と Sinlarku [Sinlaka] をまったく同じように大事にしていた。2人の神は両方とも良いので、彼は2人の神に一生懸命にすがりついていた。2人の神に仕えることはできないと我々が言うことを、彼は理解しようとしなかった [O'BRIEN 1979: 255]。

このように、多くのコジャエ島民は、キリスト教の「神」を、伝統的な神々とは矛盾するものとは考えず、伝統的な神々の世界に新たに付け加えられた神と考えていたのである。

教会の礼拝には出席しない者でも、キリスト教の安息日の慣習に従う者は多かった。彼らは、日曜日には上等な洋服を着て一日中家でごろごろと過ごし、家で「日曜日」をしていた。王（10代目の Awane Lepalik II）も教会とは疎遠ではあったけれども、1860年には新しい教会を建てたいという Snow の要請を受け入れた。しかし、王は教会の建設費用の支払いを要求してきた。Snow がこれを拒否して島を去ると脅すと、王は要求を引っ込めて教会の建設を開始した。Snow はできあがった教会に満足せず、もっと手を加えることを要求したが、王はこれにも応じた。さらに必要があれば修理を行なうことも約束した [O'BRIEN 1979: 255-256]。

コジャエの人口の減少が著しいこともあって、Snow は1862年8月にコジャエ島を去ってマーシャル諸島へ活動の拠点を移したが、この時、成人の信徒の数は27人であった。Snow は、島を去ってからも毎年短期間コジャエを訪れたが、コジャエの教会の運営は島民の手に委ねられたのである [HEZEL 1983: 167; O'BRIEN 1979: 257]。

島民の人口は年々減少の一途をたどっていた。この結果、平民からの貢納も減少し続け、首長制の根幹も揺らぎはじめていた。そして、島民は伝統的な宗教に対して懐疑的になっていった。しかし、首長たちは、伝統的宗教により一層固執することで、事態を乗り越えようとした。Snow が島を去った後、首長たちは島民を集めて昔の歌や踊を行なわせ、安息日も守らせなかった。Keducca をはじめとする信徒たちはこれに異議を唱えたが、王（Awane Lepalik II）はこれを受け入れなかっただけでなく、信徒の土地を取り上げて畑を荒した。その後、王は自分の作物を植付けるためにこの

土地に検分にやって来て、その場で急死した。そして、それは安息日である日曜日に起こった。1863年に起きたこの事件は、キリスト教を冒瀆した罪の報いを王が受けたのだと考えられて、伝統的な宗教を信奉する首長たちに大きな衝撃を与えた [HEZEL 1983: 168; O'BRIEN 1979: 258-259]。

1863年には、ポーンベイ島から島民伝道師をビンゲラップ島へ派遣する計画が実施されたが、島に上陸できなかつたので、コジャエ島で布教をさせることになった。この島民伝道師は、1860年にポーンベイ島で最初に改宗した Narcissus という名の男であった。半年ほどの滞在中、彼は精力的に布教活動に従事して、50人を改宗させた。このなかには、2人の若い首長も含まれていた [MH (Snow) 1864: 295]。このようにキリスト教は島民の間に浸透しつつあったけれども、王や数人の高位の首長の反対は依然として続いていた。彼らは、首長の位を持つ者が信徒となったら土地を放棄すべきだといって、改宗した首長の土地を没収した。Snow が仲裁に入って、没収された一部の土地を返却させた [HEZEL and BERG n. d.: 250]。

1865年の終り頃にコジャエを訪れた宣教師の Emerson は、島民の宗教事情を、「慎み深さ、謙遜、勤勉、思慮深さ、探究心、自立性、キリスト教的な精神といったものを、私は、ミクロネシアのいかなる地域よりも、この人々の中に多く見出した」と記している。彼が持参したコジャエ語の「マタイによる福音書」を熱心に勉強し、前から持っている「ヨハネによる福音書」は多くの者が暗記していた。もっと知識と理解を得るために、英語の旧約聖書を求める者もあった。「これらの人々が『神』に対して子供のような純真な信頼を寄せていることは、見誤る者がないほど明白なことだ」。王（11代目の Awane Salik II）と彼の兄弟はキリスト教に帰依していなかったが、彼らの妻たちは入信したいと思っていた。けれども、夫たちがそれを許さなかつた。しかし、王は伝統的な宗教に対して疑問を感じていた。「王は昔からの嵐と季節を司どる神を、頼りにならず役に立たないとして見放した。そして、王は真実の『神』についてもっと知りたいと望んでいる」 [MH (Emerson) 1866: 134]。

1866年の8月にハワイ人の伝道師 Kanoa がコジャエに派遣されたが、Kanoa は翌年のはじめまでに、百人以上の島民を新たに教会に迎え入れた。66年には3つの石造の教会が建設され、そのうち一番大きなものは「王とすべての人々によって」レラ島に造られた。1867年には Snow は2月から11月まで島に滞在し、彼の不在期間中の急激な改宗から生じた「不正」 [Kanoa によって不適当な者まで信徒とされたことを指す] を正すとともに、4人の島民を教会の執事に任命した。このうちの1人は、King George の息子の George であった [O'BRIEN 1979: 262]。コジャエ島での長期の滞在

を終えたあとで Snow は、改宗者の数は197人であり、それは全人口のほぼ半分であると記録している。翌68年の改宗者の中には、王の妻や首長の妻も含まれていた [MH 1869: 168]。

1869年には、成人の大部分が教会に受け入れられ、George は牧師に任命されて教会の管理を任された [HEZEL and BERG n. d.: 251]。王と共にキリスト教に反対していた高位の首長の Kanka も改宗した。王は次第に孤立していった [O'BRIEN 1979: 263]。

1869年、Snow は、コジャエ訪問中に興味ある出来事が起こったと報告している。

島の7つの地区から7人の代表が選ばれて、月に1度、王と7人の首長と共に会合を持つことになった。彼らは、島の社会の様々な問題を討議し、島全体の幸福や繁栄のために法律や規制を制定しようとしていた。王は自由主義者ではなく、彼の権力が侵害されることを極度に警戒し、王の財産を増やす機会はどんなに僅かであっても損なわれることのないようにと疑い深く見守っていたので、この活動が将来どのように進むかを予測するのは容易ではない。しかし、王が絶対君主であることを考えると、これは、正しい方向に踏み出した偉大な一歩である [HEZEL and BERG n. d.: 251]。

選出された島民の代表は必ずしもキリスト教徒ではなかったようだが、彼らの多くが伝統的な社会体制はキリスト教の教えにそぐわないと考えていた。Snow は、この評議会の創設によって、王の権力と権威を制限し抑制することを期待していた [O'BRIEN 1979: 263]⁷⁾。

Snow が1871年の秋にコジャエを訪れた時には、教会は苦境に陥っていた。牧師であった George は、1870年の3月に死亡していた。信徒の中には死亡した者もあり、外国船に乗り組んで島を去る者もいた（執事の1人も、島から出ていった）。教会を離れる者も多かった。罪を犯して教会から追放される者もあり、そのなかには王の妻もいた。この時に、Snow は Likiak Sa という島民を牧師に任命した [O'BRIEN 1979: 265-266]。

しかし、1872年には事態は好転したようで、この年コジャエを訪れた Alexander は、「彼ら [コジャエ島民] は、私がマイクロネシアで見たなかで、一番文明化され、洗練された人々である。福音はここにしっかり根をおろしている」 [MH 1873: 93] と記している。Sarfert は、キリスト教の影響で、儀礼の時の飲み物であるカヴァが

7) ポーンベイでも、同じような組織がプロテスタントの勢力の強いマタラニームで1873年につくられたが、結局失敗に終わった [MH (Sturges) 1874: 253; 中山 1985: 899]。

Awane Salik II王（在位1863-74）によって禁止されたと述べている [SARFERT 1919-20: 410]⁸⁾。

そして、1874年には、人々が王を追放するという事件が起こった。

世俗的なことでも道徳的なことでも、島の事柄に対する王の方針ややり方に長い間不満を抱いていた首長や人々が、先週の月曜日、11月2日に集会を開いた。2番目の地位にある首長の Kanku [Kanka] がこの会議を統轄して、すべての問題が自由に討議された。発言を望む者はすべて発言した。そして、投票が行なわれて、王を追放することが全員一致で決定された。それから、Kanku が Sigera [Sikihra] を王とするという動議を提出し、多くの人々がこれを支持した。この動議も満場一致で可決された。それで、以前の Sigera が今や王 [12代目の Awane Sru N] となった [MH (Snow) 1875: 136-137]。

Snow は王を追放したこの出来事を「無血革命」と呼んだが [MH 1875: 137]、教会の勢力はこれほどまでに強力になっていた。追放された王の Awane Salik II が1863年に王位に就いた時に王位を争った Kanka と Sikihra も、その後信徒となっていた。教会の権威に服さなかった王は、島民の集会によって王位を剥奪されたが、この集会は教会で行なわれた。伝統的な宗教を復活させようとする試みは失敗に終わり、伝統的な統治システムに代って、教会が新たな統治機構として機能するようになっていった。そして、初めてのキリスト教徒である王の即位式は、教会で宣教師の Snow によって行なわれた。これまで、王位就任の儀式は伝統的宗教の司祭者によって行なわれていたのであるから、キリスト教による即位式は、伝統的宗教からキリスト教への移行を明白に示すものであった [O'BRIEN 1979: 270]。

今や事実上すべての者が信徒となり、教会が宗教的・世俗的な事柄のほとんどを統制するようになっていった。教会は、牧師を中心として、選出された役員によって運営された。役員には貴族や平民の区別もなく、役員の選出は民主的であった。そして、島民の間での階層の区別は、次第に意味を失っていった [HEZEL 1983: 170]。Schaefer は、首長制から教会組織への移行を、生得的な地位のシステムから獲得的な地位のシステムへの変化ととらえている [SCHAEFER 1976: 62]。

1879年には、マーシャル諸島民のための学校がコジャエに移転してきた。移転の理由は、珊瑚礁の島での生活がアメリカ人宣教師にとって耐え難かったことと、生徒たちを家庭の悪影響や首長の干渉から守るためであった。この学校は、レラ島から遠く

8) 既述のとおり、ポーンベイではカヴァ（シャカオ）は、現在でも飲まれている。

離れた、本島の西部の Mwot という所に建てられた。この学校は、マーシャル諸島民に教師や説教師になるための教育を授けることを目的としたものであったので、コジャエ島民には直接の関係はなかった [O'BRIEN 1979: 270-271]。

ところが、学校が移転してまもない1880年に、王位が剝奪されるという事件がまた起こった。宣教師たちはこの経緯については記録を残していないが、ドイツ人の人類学者 Sarfert によると、王の更迭は学校の用地の問題と関係があったという。彼によれば、王は Mwot 地域の土地を宣教師に売却して金を得たが、その金を一人占めして、Mwot の住民には何も与えなかった。この事が原因となって、島民が集会をもち、王から位を奪ったという [SARFERT 1919-20: 386]。

Peoples は、この頃までに平民は耕作している土地を自分のものと見做すようになっており、王が土地を取り上げたのは、平民の権利を侵すものと考えられたのだと、この事件を解釈している [PEOPLES 1985: 49]。Ritter も、これは王が土地を取り上げる権利を行使した最後の例であろうと言っている [RITTER 1978: 228]。

1878年頃、マーシャルを中心に営業していた Capelle 商会は、コジャエの王から交易所を開設する許可を得た。その後、Hernsheim 商会がやってきて、Capelle 商会は破産したと嘘をついて事業を開始した。その直後に Capelle 商会の船がやって来たので、島民はだまされたことを知り、Hernsheim 商会との取引の契約を破棄した。1年半ほどたった1880年の2月に、Hernsheim 商会は再びコジャエにやって来て、契約を破棄された賠償として133,000ポンドのコブラを要求し、これが受け入れられなければ、島の土地を没収すると宣言して、王や首長たちにこの要求を受諾させた。要求されたコブラは島の年間の産出高の倍近い量であったが、Capelle 商会の援助を得て、島民はなんとか支払うことができたのであった [HEZEL 1983: 253-254]。この事件が王位の剝奪と直接関係があったかどうかは不明であるが、王と次に王となる Kanka との間に、この事件に関して意見の相違があったことは確かであるという [O'BRIEN 1979: 273-274]。

いずれにしても、1880年の王位の剝奪は、コジャエ島社会がキリスト教化していったと同時に民主化され、王や首長の特権が制限され、平民の権利が伸張していったことを示している。

新たに王となった Kanka (13代目の Awane Sru V) は高貴な生れの者ではなく、Lishne 氏族から初めて王位に就いた者であった。この王は、あまり人望がなく、息子の骨を掘り出して海に埋葬する伝統的な葬制を行なったり、しばしば酔っ払ったりしたので、教会を追放されたこともある。島民はしだいに貢納の義務に異議を唱え始

めた。王は土地は自分が所有していると考えていたが、キリスト教徒に対しては強く貢納を要求しなかったという [LEWIS 1967: 39]。

1884年に王は、王や首長に対する表敬行動 (*sinak*) を廃止した。Lewis は表敬行動の廃止は宣教師の要請に応じて行なわれたのだとしているが [LEWIS 1967: 39]、宣教師は自分たちがこの件に関与したことはないと言っているという [O'BRIEN 1979: 274]。表敬行動の廃止は、王がこれまで王を輩出することのなかった Lishne 氏族の出身であったことと関係があると考えられている [O'BRIEN 1979: 275]。この頃は、コジャエ島の人口が最低であった時である。そして、ほとんどの島民はキリスト教に改宗していった。そして表敬行動の廃止は、伝統的な社会制度の終焉を予告するものであった。

Awane Srū V が1888年の終りに死亡し、1890年に就任した次の王も数か月後に死亡すると、王にふさわしい者は島にいなかった [SCHAEFER 1976: 52]。そこで、1863年からハワイに住んでいた者が呼び戻されて王となった。この王、15代目の Awane Sa II は1890年に即位したが、最初はキリスト教に反対していた。宣教師を王の権威を奪うものとして非難したこともある。しかし、1902年までに、島のほとんどの者が教会に加わっていた。1905年には、コジャエの教会はマイクロネシアで初めて独立した教会となり、自主的に活動できるようになった。また、この年には王も改宗した [O'BRIEN 1979: 276]。西洋人と初めて接触した時、コジャエの人々は全島の海岸地域に散らばって住んでいた。しかし人口の減少もあって、世紀の変り目までには、教会を中心とした集村を形成するようになった。集村に住むようになった主な理由は、教会の活動を行なうのに便利であったからである [RITTER 1978: 242-243, 280, 288-289]。

Awane Sa II が1910年に死亡した時、貢納はほとんど行なわれておらず、王はほとんど影響力をもっていなかった。この時には3人の首長しかおらず、王にふさわしい者もいなかった。コジャエ島民も王位を廃止することを望んでいたという。しかし、ドイツ官吏がやってきて、政庁の命令を伝達する者が必要なので、選挙で王を選ばせた。コジャエの最後の王の Awane Na は、King John と呼ばれたが、彼は前の王の甥であり、教会の執事でもあった。王に選出されたのは、彼が教会の重要な指導者であったことが大きいという。Sarfert は、「彼のリーダーシップの下でコジャエは一種のキリスト教による神政王国となった。このことは、コジャエは昔も神政国家であったので興味深い」と述べている [SARFERT 1919-20: 345]。

King John は人々に貢納を要求し、法に違反した者に課される労役を公共労働にで

はなく私用に使った。1912年に島民がこのことをドイツ政庁に訴えると、王は激しく叱責された。ドイツ政庁は貢納の廃止を命じ、その代わり王には、島民男子から集められる3マルクの人頭税の3分の1を得ることと、王の為の労働を島民に1年に2日命ずることができることが認められた [LEWIS 1967: 42]。King John は日本時代には総村長に任命された。アメリカ統治下で Chief Magistrate の選挙が行なわれ、これに King John が敗れると、彼は王位の廃止を決定した。「すべてのコジャエ島民はキリスト教徒であり、すべてのキリスト教徒は平等だから」というのが、その理由であった [SCHAEFER 1976: 54]。その後、彼は牧師に任ぜられた。

ここで、コジャエにおけるキリスト教の受容の過程をまとめると、次のように言うことができる。王は最初は西洋製品の供給源として宣教師を歓迎する。しかし、宣教師が一夫多妻や貢納に反対し [O'BRIEN 1979: 287]、キリスト教を受け入れると首長としての様々な特権を失うことになることがわかると、キリスト教に敵対的な態度を採った。しかし、平民の間でキリスト教の改宗者が続出し、やがて信徒が王に選出されるようになって、全島のキリスト教化が完成する。キリスト教が受容され、信徒の数が増大していくのとは対照的に、この期間、首長制は弱体化の一途をたどり、ついには廃止されて教会組織にとって代わられることになる。

島を訪れる西洋人が富や物質においてはるかに卓越しているのを見て、コジャエの人々は、かなり早い時期から、西洋のやりかたを学ばねばならないと感じていた。1848年、King George は、そうしたことを教えてくれる宣教師を島に迎えたいと、寄港した船の船長に述べている。

彼 [King George] と彼の臣下の多くは、宣教師がやって来て、彼らと一緒に住んでくれることを望んでいる。もし、良い人がやって来て、白人のように読むことや理解することを子供や人々に教えてくれるのなら、宣教師には家を建て島で得られる最上の食物を提供するだろうと、彼は私に言った。私が話したほとんどすべての臣下たちも同じ意見であった。…彼らはハワイ諸島の人々が進歩したことを知っており、彼らを啓発してくれることを望んでいる [O'BRIEN 1979: 233]。

こうして、コジャエの人々は、西洋人のやり方、西洋人の神に強い関心を抱くようになったのである。

他方、伝統的な神々に対しては、西洋人との接触の様々な機会を通じて、不信を抱くようになっていった。その一例を挙げると、1850年にコジャエを訪れた捕鯨船の船

員は、王がタブーを課して触れることを禁じたヤシの木によじ登って実を採った [JONES 1861: 139]。コジャエ島民にとってタブーを破ることは死を意味したのに、外国人は神々の怒りを免れた。

伝統的な神々への最大の不信は、西洋人がもたらした病気によって人口の減少が生じ、島民が絶滅してしまうかもしれないという状況において生じた。こうした状況に対し、コジャエの神々はなす術を知らなかった。伝統的な宗教からキリスト教へという大きな転機となったのは、先に述べた、キリスト教徒の土地を奪った王が急死した1863年の事件であった。これまで少数派であったキリスト教徒は、その後まもなく多数派となる。伝統的な宗教への信頼が失われると、王の権力は弱体化し、最終的には首長制の崩壊を生じたのである。

VI. 現在のコジャエ島社会

現在のコジャエでは、ほとんどすべての島民はプロテスタント教徒である。コジャエ社会において、教会はどのような位置を占めているのであろうか。

Schaefer は、現在のコジャエ島社会を、家族⁹⁾、社会 (community)、教会の3つの領域に分けて考察している。Schaefer の言う「社会」とは、価値・観念・慣行などにおいて家族と教会の領域に属さないものの総体を指し、具体的には友人関係、経済的な地位、勤務する役所における地位などである。家族、社会、教会の3つの領域は、いずれも地位にもとづくシステムを持っているが、地位を決定する基準はそれぞれの領域によって異なっている。人々はこの3つの領域の地位を同時に占めているが、このために他の領域の地位のシステムとの間で矛盾を生ずることがある。これを Schaefer は「地位の葛藤」と呼んでいる。そこで、個人の年齢に応じてこれらの3つの領域のうちのどれか1つを優先させることで、こうした矛盾を解消しようとしている、と Schaefer は言う。すなわち、子供の時には家族の領域における地位を、若者は社会の領域の地位を、成人すると教会の領域の地位を優先させている。そして、人間のライフ・サイクルにおいて優先させる領域を移行することを、「罪」というシン

9) ここで、コジャエの家族・親族における変化について簡単に触れておく。母系氏族は1880年までに重要ではなくなり、現在は存在しない [RITTER 1978: 79]。1890年以前は、妻方居住が多く土地の相続は母系的なものが多かったが、現在は妻方居住を行なう者も少なくないが、夫方居住が多くなっている [RITTER 1978: 192-195, 232-233]。現在、土地は一般には息子たちが相続するが、娘も相続することがある [PEOPLES 1985: 78-79]。家族 (核家族と拡大家族) は、父方へのかたよりをもつ双系 (bilateral) の傾向を示す [RITTER 1978: 82]。日常生活では第2イトコまでの親族が重要である [PEOPLES 1985: 129]。

ボルを用いて示しているのが、コジャエの特徴なのである。子供は教会の罪から免れているが、若者となると、特に男子の場合はほとんどの者が、飲酒・喫煙・姦淫などの罪を犯して教会を離れる。しかし、30才を過ぎると、人々は罪を悔いて洗礼を受け、教会の領域の地位を占めるようになるというのである [SCHAEFER 1976]。

このように、コジャエの成人にとって、教会はきわめて重要な意味を持っている。コジャエには Lelu, Tafunsak, Malem, Utwe という4つの村があるが、それぞれの村に教会組織がある。そして村の教会組織は、様々な集団からなっている。

以下では、Schaefer [1976: 102-127] と Peoples [1985: 117-118] により、教会組織の集団について述べる。

「組 (*kumi*)」。村はいくつかの集団 (レラ村の場合は4つ) に分かれている。この集団は日本語の「組」という名で呼ばれて、組には「イチクミ」、「ニクミ」というように日本語の数字がついている。組は日本時代に導入された組織だが、現在は共同作業や娯楽のための集団となっている。教会に関係することでは、教会の祭宴や儀式に用いる品物の準備を組が行なう。信徒でなくても組に入ることができる。

「共励会 (*endeavor, etawi*)」。共励会は年齢によって、子供、若者、大人の3つの集団に分かれる。共励会の会員は毎週日曜日の午後に集まって、讃美歌を歌い、聖書の勉強や祈禱を行なう。会合には誰でも出席できるが、共励会の正式なメンバーは罪 (飲酒、喫煙、姦淫、隣人との喧嘩など) を犯していない人、または罪を犯しても悔いあらためて会員の前で罪を告白し、再び入会を認められた者である。若者と大人の共励会には、「礼拝 (*worship committee, komiti in alu*)」、「訪問 (*walking committee, komiti in fas*)」(会合に欠席した人々を訪ねて、出席を呼びかける)、「援助 (*helping committee, komiti in kašu*)」(病人や困窮者を訪問し、若干の贈り物をする)、「建築 (*building committee, komiti in lom*)」(教会の建物の建築・補修や清掃)などの小委員会が設けられている。

「聖歌隊 (*choir, kwaiu*)」。日曜日の礼拝や葬儀、または他の特別の機会に讃美歌を歌う。聖歌隊には正式な共励会会員で、週に1、2度夜に行なわれる練習に参加すれば入隊できる。

「教会 (*Church*)」。共励会会員で、立派な生活をおくった者が、教会の委員会と教会員全員による審査投票を経て正式の教会のメンバーとなる。教会のメンバーとして認められると、洗礼を受け、正餐に列席することができる。教会は教会委員会 (*Church committee, komiti lun Church*) によって運営される。委員会には牧師、執事、会計係などの役職がある。

コジャエには、各村のこのような組織を統合する全島組織もある。これには、各村の教会役員から構成される「全島教会 (*Church All*)」と共励会の全島組織である「全島共励会 (*Etawi All*)」の2つの組織がある。以上が Schaefer と Peoples の記述にもとづくコジャエの教会組織である。

このように、コジャエの教会組織は数多くの集団から構成されており、それぞれの集団には多くの役員がいて、集団の活動の運営に携わっている。教会組織の役員は社会的に尊敬されている。「教会」の役職のいくつかは牧師や説教師などの聖職に就いている者しか就任できないが、他の多くの役員の地位は教会員の選挙によって選ばれる。そこで、こうした地位をめぐる秘かな競争がくりひろげられ、人々は規律を守り、教会の活動に積極的に参加する。役員選挙は毎年行なわれるが、新役員の就任式は教会における大きな行事となっている [PEOPLES 1985: 119]。

Schaefer も指摘しているように、教会組織は1つの地位のシステムを構成していて、それらの地位はヒエラルキーを形成している。Lewis も、コジャエではキリスト教を受け入れた時に、教会の組織を新しい地位のシステムとして受け入れたと言い、教会組織は、「牧師——執事——教師——信徒——教会を追放された者」というヒエラルキーを構成していると述べている [LEWIS 1967: 84]。Peoples も、コジャエの教会は非常に複雑な役職のヒエラルキーからなるシステムを作りあげ、役職に就いた者は高い社会的地位を得ると述べ、「地位の過剰」はコジャエの教会の最も著しい特色であると言っている [PEOPLES 1985: 120]。

アメリカ時代になって、コジャエにも民主的な政治体制が導入されたが、教会はこれに対しても強い影響力を行使している。行政職や議員には教会のリーダーが選出されることがある。そうでない時も、特に Chief Magistrate の場合は、教会のリーダーの協力なしには、円滑に仕事を行なうことは困難だという。またコジャエ島の議会の決定も、主として非公式の場での話し合いによって決るので、こうした際には教会のリーダーの発言力が大きいという [SCHAEFER 1976: 155, 168]。レラ村では、「教会」に属す人々は、40才から50才までの男子の3分の1ちょっと、50才以上になると4分の3以上だという。Schaefer は、有力者のほとんどは「教会」員であり、コジャエ社会は、「教会」員である有力者による神政政治体制であると言っている [SCHAEFER 1976: 205-208]。

現在のコジャエの経済は、ポーンペイと同様である。人々は農業と賃金労働の二重経済を営んでおり、食料を自分の家の畑で生産するとともに、賃金労働で得た収入で外国製品を購入している。

Peoples の調査によると、レラ村民の年間の現金収入（1975年）は約65万ドルと推定され、その内訳は行政関係の仕事からの収入が40万ドル、輸出用のコブラの生産による収入が6万ドルである。さらに、民間の商店などに従事する者の収入が15万ドル、魚・豚などを島民に売却した額が4万ドルほどである。これに対してレラ村における支出は、家の建築資材に6万ドル、自動車・モーターバイクなどに5万ドル、日常の食料品に22万ドル、家庭用品に7万ドル、儀礼用（教会と通過儀礼）の食料・衣服などに10万ドル、残りの15万ドルは、娯楽・アルコール・タバコ・旅行・教育費・衣服・貯金・ガソリン代などに使用されている [PEOPLES 1985: 85-104]。

ポーンベイでは、アメリカ統治下の経済状況において、首長たちが祭宴において貨幣経済と自給自足の農業を結合させ、祭宴への貢献が依然として地位上昇の1つの要因となっている。コジャエの場合は、首長制が廃止された後、社会は教会を中心に構成されていて、人々は教会における地位を確立するために、教会のお祭り（クリスマス、新年、教会の建物の落成など）に外国製の食料と島産の食料（豚・魚）を競って差し出している。1975年、レラ村では、教会関係のために44,000ドル相当が支出されたという [PEOPLES 1985: 173]。

現在のコジャエにおいては、教会はコジャエ人のアイデンティティの基本的部分を構成するものとなっている。信徒としての厳しい規律を守り教会の活動に参加することが、コジャエ人を他のミクロネシア人から区別する重要な要因である [PEOPLES 1985: 115]。コジャエの教会は離婚を認めていない。離婚する者はコジャエ人でないといわれ、離婚を行なわないことが、コジャエ人と他のミクロネシア人を分ける基準ともなっているのである [RITTER 1978: 347]。

コジャエでは、教会員でなければ本当の人間ではないといわれている。教会から除名された人は「教会の外の人」と呼ばれ、キリスト教徒とは明確に区別されていて、30才以上であっても若者と同じ扱いを受ける [PEOPLES 1985: 118; SCHAEFER: 1976: 205, 211]。ほとんどの島民は、若い時に罪を犯して一度は教会を去る。しかし、年を取っても教会に戻らなければ、家族などまわりの者から圧力がかかる。このように、現在のコジャエ社会は教会を中心にして構成されているのである。

Ⅶ. 存続する首長制と廃止された首長制

ポーンベイとコジャエは、同じような社会・文化を持ち、同じような外国との接触の歴史を経験したように見える。しかし、仔細に見ると、いくつかの相違を見出すこ

とができる。以下では、そうした相違について述べ、首長制がポーンベイ島では保持され、コジャエ島では廃止された理由を考えてみよう。

両者の相違は、島社会自体に起因する内的要因と、外部世界との接触の状況にもとづく外的要因の双方において存在すると、筆者は考える。

内的要因については、2つの重要な相違がある。1つは人口の規模の問題であり、もう1つは、全島の政治体制の問題である。

まず、人口の問題であるが、コジャエの人口の規模がポーンベイに比べて小さかったという相違がある。ポーンベイの人口は1854年の天然痘の流行以前には約1万人、コジャエでは西洋との接触の始まった時期の人口が約3,000人と推定されていた。両方の島とも、外国からもたらされた病気の流行によって人口の急激な減少を経験したことは、同じであった。しかし、ポーンベイでは最低となっても1,700人ほどの人口を擁していたのに、コジャエでは300人台にまで落ちこんだ。ポーンベイでは首長の死亡によって空位が生じても、位を求める人々が引きも切らずにいた。最初のナンマルキであるイショケレケルは Dipwinpahnmei 氏族の出身であったが、マタラニームでは23代目といわれる現在（筆者の調査時の1980-81年）のナンマルキに至るまで、ずっと同じ氏族からナンマルキを輩出している。ところが、コジャエでは王位や首長の位の後継者がいないために、王を出す氏族が次々と変えられた。しかし、それでも後継者を見つけることが困難であった。したがって、同じような人口減少を経験しながらも、人口規模の小さなコジャエではより深刻な事態を生じたのである。

西洋との接触が始まった時期、ポーンベイには5つの首長国が存在したが、コジャエは単一の中央集権的な体制を保持していた。これが内的要因の第2の相違点である。このことは、その後の社会変化に大きな意味を持つ。

ポーンベイは一見すると同質的な社会だが、しばしば地域的な相違が見られる。このことは特に首長国の間において著しい。例えば、言語においても、キチャーでは、他の首長国とは若干異なる方言を話している。そして Fischer も、西洋との接触以前のポーンベイにおける居住様式や土地所有に関して、「同じ概念が用いられていても、集団【首長国や首長国内の地域】によっては強調される所が異なっていたかもしれない」と言っている [BASCOM 1965: vより引用]。首長国の間では、威信を求めて競合し、戦争が生ずることもあった。こうした地域的な相違の強調や対立のために、統治国の政策に首長国が異なる対応をし、それが反乱の発生にもつながったことは、既に記したとおりである。

このように、ポーンベイでは、首長国間で相違が見られただけでなく、それがしば

しば重視されていたのに対して、コジャエは単一の首長国であったので、このような多様性の発現は制限されていた。ビーチコーマーが居住するようになると、ポーンペイでもコジャエでも、島民と白人が対立する事態が生じた。コジャエでは全島民が一致していたため、ビーチコーマーを島から排除することが可能であったのに対し、ポーンペイでは、意見の相違からビーチコーマーに味方する島民がいたために、ビーチコーマーは島に居住し続けることができた¹⁰⁾。多様性の発現における相違は、ポーンペイでは、スペイン時代のカソリックの布教以来、島民がプロテスタント教徒とカソリック教徒とに二分されているのに、コジャエではほとんど全員がプロテスタント教徒であることにも示されている。

O'Brien は、本稿と同じ問題を扱った論文において、ポーンペイとコジャエとの間に生じた相違は、人口の変化を含む「環境的要因」と社会構造・組織と文化に内在する「内的要因」によるところが大きく¹¹⁾、外国との接触の性質や程度に由来する外的要因は直接の原因としてはそれほど重要ではないと述べている。O'Brien は、ポーンペイがコジャエと比べてより広範囲にわたる外国からの影響を受けたと述べてはいるが [O'BRIEN 1979: 291]、島民のキリスト教への改宗と首長制の変化を考察するにあたっては、外的要因として宣教師による布教活動のみを考慮している。そして、宣教師のポーンペイとコジャエへの影響は基本的に類似しているため、外部からの影響は、両者の相違を適切に説明することはできない。だから、変化の要因としては、それほど重要ではないというのである [O'BRIEN 1979: 294]。

筆者は、外的要因もまた重要であり、むしろ外的要因が内的要因（人口の問題や全島の政治体制）と結びついたところに、ポーンペイとコジャエにおいて相違が生じた原因が存在すると考える。以下では、ポーンペイとコジャエの外国との接触の歴史を比較して、外的要因における相違を明らかにしよう。

既に述べたように、ビーチコーマーは、コジャエではごく僅かしかいなかったのに、ポーンペイには多数居住していた。プロテスタントの宣教師は1852年にポーンペイとコジャエで同時に布教を開始した。しかし、コジャエで布教にあっていた Snow は1862年には島を去った。その後、Snow は毎年のように、短期間島を訪れたけれども、1879年に宣教師の Whitney が赴任するまで、教会の運営はほとんど島民の手にまか

10) ポーンペイとコジャエのビーチコーマーに関する相違については、別稿 [中山 1992] を参照。

11) 筆者が「内的要因」と総称したものを、O'Brien は「環境的要因」と「内的要因」の2つに分けている。

されていたのである。島民によって運営されたコジャエの教会は、宣教師が必要と考える以上に厳しい規律を課した [LEWIS 1967: 36, 82; O'BRIEN 1979: 262]¹²⁾。ポーンペイでは、スペイン政庁によって追放されるまで、アメリカ人宣教師が常駐して布教を続けた。

その後、植民地時代になると、ポーンペイ島には様々な外国人が来島した。スペインはポーンペイに政庁を置き、官吏や兵士が来島した。カソリックの宣教師も同時にやって来て布教にあたった。ドイツ時代にはドイツ人の官吏や兵士が来島した。ところが、コジャエにおいては、スペインとドイツが統治した時代でも島には官吏は駐在せず、外国統治の影響をほとんど受けなかった。コジャエではカソリックの布教も行なわれなかった。このように、ポーンペイでは、ひきつづき様々な種類の外国人との接触があったのに対して、コジャエでは比較的孤立した生活が続いた。

では、こうした外的要因における相違は、それぞれの島社会でどのような意味を持ったのであろうか。

ポーンペイでもコジャエでも、人口減少のために、自分たちは絶滅するかもしれないと危機感をもった。伝統的な文化・社会制度では事態の解決が計れないために、別の文化・社会制度が求められた。コジャエにはプロテスタントの宣教師以外の外国人はほとんどいなかった。このために、コジャエの人々にとってモデルとなりうる文化・社会制度は、プロテスタントの信仰と教会の組織だけであった。西洋の文化・社会はプロテスタントによってのみ代表され、それがコジャエのものよりも有効であれば、コジャエの人々にはそれを選択する以外に方法はなかったのである。

これに対して、ポーンペイでは、プロテスタントの宣教師以外にも、様々な種類の外国人が常に存在した。そして、これらの人々の考え方も文化も様々であり、ビーチコーマー・交易者と宣教師や、プロテスタントとカソリックのように、相互に対立することがしばしばあったのである。外国からもたらされたモデルが1つではなく数多く存在し、しかもそれらがしばしば対立したことは、個々の選択肢の価値を相対的に減少させることにもなった。したがって、ポーンペイでは、コジャエのように絶対的な唯一のモデルというものは存在しなかった。そして、このことは、ポーンペイの伝統的制度の価値を相対的に高めることにもなった。ポーンペイには様々な種類の西

12) O'Brien はプロテスタントの布教活動はポーンペイとコジャエでは基本的に同じとしているが、同じ宗教団体による布教であるので基本的には同じであっても、詳細に見ると、このように相違もあると思われる。この問題はいずれ別の機会に考えることにし、本稿では、西洋からの影響の中でプロテスタントの布教活動が占める位置の相違に注目する。

洋の観念がもたらされた。先に述べたように、対立する首長国の存在にもとづき多様な観念を許容することのできたポーンベイ社会は、首長制を維持しながらも、多くの選択肢から選ぶ自由を保持しえたのである。

外的要因として、もう1つ重要なことがある。それは、ポーンベイとコジャエの首長制に対して、植民地政府の関与のあり方が異なったことである。

ポーンベイでは首長制を保持し続けてきたけれども、ずっと安泰であったという訳ではない。人口減少の他にも、首長制に代る政治体制をポーンベイに築こうとする平民のプロテスタント教徒たちによる動きもあった。しかし、ポーンベイにおいては、スペインとドイツの政庁が、首長制に挺入れし、それを支える役割も果たしたのである。2つの政庁は、ポーンベイの統治のために、首長達に俸給を与えた。首長の権力がある程度制限しながらも、それを積極的に認めもしたのである。ドイツ時代において、首長が自分たちの権力を制限することになる土地改革案を受け入れた理由の1つは、土地改革案が首長の権力を認めるものでもあったからである。

コジャエでは、スペイン統治はほとんど影響を与えていないが、ドイツ時代には、島民が王位の廃止を望んでいたにも拘らず、ドイツ政庁は統治のために王を選挙で選出させた。コジャエの首長制は崩壊しつつあり、この時点でドイツ政庁が挺入れしても、首長制を維持するには手遅れであった。それでもこのために、首長制は第二次大戦後まで細々と続くことになったのである。こうしたことから、植民地政府の支持のあるなしが、首長制の持続ないしは崩壊ということに密接な関係があったことが理解される。

これまで述べてきたところを、図式的に要約すると以下のようになる。

コジャエ

- ①深刻な人口減少×②島全体が統一的な対応×③プロテスタントのキリスト教という外部からの唯一の影響×④首長制への外部からの支持の欠如＝首長制の廃止、教会組織による統合。

ポーンベイ

- ①コジャエよりは深刻でない人口減少×②島内で異なる対応×③様々な外部からの影響×④首長制への外部からの支持＝キリスト教に改宗するが、首長制は存続。

ポーンベイでは、多くの外国人が住み、様々な西洋の観念が入ってきたが、島の伝統的な社会・文化構造を保持したままで、それらを受け入れた。これに対して、コジャエでは、島に外国人を受け入れることはなかったけれども、西洋の考えが一度入ると、それは島の伝統的な社会・文化構造を排除してとって代った。O'Brienはこのこ

とを、「社会的には受容的だが、文化的には自足的」であるポーンペイと「文化的には受容的で、社会的には排他的」であるコジャエと表現している [O'BRIEN 1979: 284]。ポーンペイにおけるキリスト教の受容は、新しい神と儀礼を伝統的な宗教と調和させ、共存させていくプロセスであった。これに対して、コジャエにおけるキリスト教の受容は、伝統的な神と儀礼を拒絶して新しい外国の神を取り入れるという経過をたどった。O'Brien は、コジャエでは伝統的な神とキリスト教の神の間には断絶があると言っている [O'BRIEN 1979: 285-286]。

このように、2つの島におけるキリスト教の受容のプロセスは対照的であった。こうした相違は、キリスト教布教以前の「過去」に対する島の人々の見方においても、はっきりと見ることができる。

コジャエにおいては、既に1880年頃に、首長は「カナカ、前はとても悪かった。今はとても良い」と言って、彼らの過去を恥じるようになっていた。昔の歌を老人に歌ってもらったが、内容について尋ねると、笑ったり冗談を言ったりするが、誰も歌詞を訳して伝えてくれなかった。その歌詞はとても悪く、異教的だからというのがその理由であった [LEWIS 1967: 83]。現在、コジャエでは伝統的文化を喪失したことを嘆く人はいない。むしろ、キリスト教の布教以前の時代を、彼らは「暗黒時代」と呼んでいるのである [PEOPLES 1985: 31]。年をとった人々は、彼らが子供の頃見た入れ墨をしていた昔のコジャエ島民のことを話すのが好きだが、その際、「下品な」、「卑劣な」、「愚かな」という言葉を頻繁に用いて笑いながら話す。そこには、過去との極端な断絶があり、過去に対する恐怖・嫌悪を見てとることができるという [RITTER 1978: 116]。

コジャエの人々は、キリスト教の受容以後、コジャエに成立した道德・価値・社会的活動を「コジャエの慣習 (*facsin Kosrae*)」と呼んでいる [PEOPLES 1985: 31]。このように19世紀の終り頃に、キリスト教的な社会・文化制度がコジャエの「伝統」として創造され、これがかつての異教的な社会・文化に代って、現在のコジャエの人々のアイデンティティの基本部分を構成するものとなっているのである。

1880年代に宣教師は「王へのお辞儀が廃止されてから、人々の背骨が固まった」とコジャエの人々が言っていることを記録している [HEZEL 1983: 316]。すなわち、コジャエの人々は、彼らの現在の生活様式を過去との対比において規定している。否定される過去の文化は、現在のキリスト教にもとづく社会・政治体制を正当化するために存在している。秩序を維持し再確認するためには、無秩序を喚起する必要がある。秩序と無秩序、善と悪は対の構造を形成し、否定的なものの存在を媒介として、他方

の肯定的なものが確認されるからである¹³⁾。

ポーンペイでは、歴史が4つの時代に区分されていることは先に述べたが、第3のナンマルキ首長制の時代と第4の西洋との接触以降の時代とは連続するものとも認識されており、コジャエと異なりその間に断絶はない。そして、この2つの時代はナンマルキを介してつながっている。ポーンペイにおける否定されるべき「過去」は、シャウ・テレルウ王朝時代であるように思われる。Wilsonは、コジャエでは、過去の王の暴政を、平民は自分の髪にいるシラミでも、半分は王のもので自分の自由にならなかったと述べたと言っているが [Wilson 1968: 33], 同じ話がポーンペイのシャウ・テレルウ王についても伝えられている。

ポーンペイの首長制はナンマルキを頂点とするヒエラルキーを構成している。個人がこのヒエラルキーに占める社会的地位は、ナンマルキからの社会的距離にもとづいている。それは、ナンマルキから与えられる称号によって示される。ポーンペイでは現在でも、称号を得て初めて、尊敬される成人としての地位を獲得することができる。相手に呼びかける時には、現在でも名前ではなく称号を用いるのが慣習である。だから、称号を持っていないと、常に非常に恥かしい思いをしなければならない。そしてほとんどすべての成人がナンマルキより称号を得ている。コジャエ人のアイデンティティが教会組織にもとづいているのに対して、ポーンペイ人のアイデンティティは現在においてもナンマルキを頂点に戴く首長制にもとづいている。そして、ナンマルキは、シャウ・テレルウ王朝の圧政を打倒して、ポーンペイに新しい政治体制を樹立した初代のナンマルキのイジョケレケルの子孫である。こうしてポーンペイの人々は、歴代のナンマルキを介してイジョケレケルまで遡ることができるのである¹⁴⁾。

このような、ポーンペイとコジャエにおける過去に対する見方の相違は、多くの人口島からなる巨大な石造建築遺跡に対する人々の態度においても示されている。ポーンペイのナン・マトルは、シャウ・テレルウ王朝による島の統一が完成したと思われる1200-1300年頃に建設が始まり、その支配が終わったと思われる17世紀の初期には現在見られるような形に達したと考えられている。ここには、歴代のシャウ・テレルウ

13) 筆者は Peoples や Ritter の記述にもとづき、このように解釈したが、清水昭俊氏は御自身の調査にもとづき、「現在では、昔話の好きな年配の個人に過去の記憶はなく、過去との対比が irrelevant になっている。バイリンガル教育の推進などによって、昔話が以前より親しいものとなった」と御教示下さった。

14) 清水昭俊氏からは、マタラーニム以外の他の首長国では、自分たちのナンマルキが、イジョケレケルと関係あるとは思っていない、との御指摘をいただいた。

王が居住し、イショケレケルがシャウ・テレウル王朝を倒した後は、彼と彼の後継者であるマタラニームのナン・マトルが居住した。ナン・マトルには王や臣下の居住地と祭祀場、墓地と司祭者の居住地などがあった。西洋との接触が始まる以前に、人々はナン・マトルでの居住を放棄した。コジャエのレラ島にある遺跡もナン・マトルと同じような構造と機能を持つものであったが、本格的な建設は1400年から1600年の時期に開始され、1800年頃までに完了したと考えられている。西洋との接触時にも人々はここに住んでいた。過去100年の間に、多くの遺跡の上に建物が建てられたために、現在原形を留めている遺跡はごく僅かである [MORGAN 1989: 58-115]¹⁵⁾。

コジャエでは、レラ島の遺跡に対して、ある者はやっかいな代物と感じており、他の者は便利な「採石場」としか考えていないという [LEWIS 1967: 92]。遺跡は豚小屋としても使われている [MORGAN 1989: 99]¹⁶⁾。しかし、ポーンペイにおいては、人々はナン・マトルに対して、現在でも畏敬の念を抱いており、近づこうとはしないのである。

ポーンペイとコジャエは、一見すると類似した社会であった。しかし、2つの島嶼社会の社会変化は大きな相違を生じた。こうした相違が生じたのは、細かく見ると、2つの島の内的・外的要因のそれぞれに相違があったからであり、それらが複雑に結びついて人々の行動の可能性の枠組にも相違を与え、その結果、人々が異なる選択をしたからなのであった。

付 記

国立民族学博物館の清水昭俊、杉島敬志の両氏は、草稿を読んで貴重な御意見と御教示をくださった。両氏に深く感謝申し上げます。

ポーンペイ島の調査は、ホノルルのイースト・ウェスト・センターからの奨学金によって行なわれた。

15) ナン・マトルもレラ島の遺跡も、ともに本島の東部にある小島にある。ポーンペイでもコジャエでも、東部の小島に最高位の首長が住んで本島を支配したという、興味深い共通点がある。

16) 清水昭俊氏によれば、コジャエの遺跡は史蹟保護の政策で、今はきれいに整備されているという。

文 献

- BASCOM, William
 1965 *Ponape: A Pacific Economy in Transition*. University of California Anthropological Records, vol. 22.
- BERNART, Luelen
 1977 *The Book of Luelen*. J. Fischer, S. Riesenbergs and M. Whiting trans. and eds, Honolulu: University of Hawaii Press.
- CRAWFORD, David and Leona CRAWFORD
 1967 *Missionary Adventures in the South Pacific*. Rutland, Vermont and Tokyo: Charles E. Tuttle Company.
- DAHLQUIST, Paul A.
 1974 Political Development at the Municipal Level: Kiti, Ponape. In D. H. Hughes and S. G. Lingenfelter (eds.), *Political Development in Micronesia*, Columbus: Ohio State University Press, pp. 178-191.
- EHRlich, Paul
 1978 *The Clothes of Men: Ponape Island and German Colonial Rule 1899-1914*. Ph. D. Dissertation, State University of New York at Stony Brook.
- FISHER, John L.
 1966 *The Eastern Carolines*. New Haven, Conn.: HRAF Press.
 1974 The Role of the Traditional Chiefs on Ponape in the American Period. In D. H. Hughes and S. G. Lingenfelter (eds.), *Political Development in Micronesia*, Columbus: Ohio State University Press, pp. 166-177.
- The Friend*
 various dates *The Friend* (journal). Honolulu: Hawaii Evangelical Association.
- GULICK, Addison
 1932 *Evolutionist and Missionary, John Thomas Gulick: Portrayed through Documents and Discussions*. Chicago: The University of Chicago Press.
- HALEY, Nelson Cole
 1948 *Whale Hunt: The Narrative of a Voyage by Nelson Cole Haley Harpooner in the Ship Charles W. Morgan 1849-1853*. New York: Ives Washburn Inc.
- HAMBRUCH, Paul
 1932-36 *Ponape. Ergebnisse der Südsee-Expedition, 1908-1910*. 3 vols. (HRAF translation). Hamburg: Friedrichsen.
- HANLON, David
 1984 *Upon a Stone Altar*. Ph. D. Dissertation, University of Hawaii.
- HEMPENSTALL, Peter
 1978 *Pacific Islanders under German Rule*. Canberra: Australian National University Press.
- HEZEL, Francis X.
 1983 *The First Taint of Civilization: A History of the Caroline and Marshall Islands in Pre-Colonial Days, 1521-1885*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- HEZEL, Francis X. and M. L. BERG
 n.d. *A Book of Readings on Micronesian History*.
- HUGHES, Daniel T.
 1970 *Political Conflict and Harmony on Ponape*. New Haven: HRAF Press.
- 今西錦司 (編)
 1975 『ボナベ島』講談社。
- JONES, John D.
 1861 *Life and Adventure in the South Pacific by a Roving Printer*. New York: Harper &

- Brothers.
- LEWIS, James L.
1967 *Kusaien Acculturation 1824-1948*. Saipan: Division of Land Management, Resources and Development.
- MELLER, Norman
1969 *The Congress of Micronesia*. Honolulu: University of Hawaii Press.
The Missionary Herald
various dates *The Missionary Herald* (journal). Boston: The American Board of Commissioners for Foreign Missions.
- MORGAN, William N.
1989 *Prehistoric Architecture in Micronesia*. London: Kegan Paul International.
- 中山和芳
1985 「ボナベ島におけるキリスト教の受容をめぐる社会変化」『国立民族学博物館研究報告』9(4): 851-914。
1986 「ボナベ社会における伝統的リーダーシップの変容の予備的考察」馬淵東一先生古稀記念論文編集委員会編『馬淵東一先生古稀記念: 社会人類学の諸問題』第一書房, pp. 59-84。
1988 「Factionと反乱: スペイン統治下のボナベ島社会」須藤健一他編『社会人類学の可能性Ⅰ: 歴史のなかの社会』弘文堂, pp. 114-136。
1989 「裁判記録からみたボナベ島の土地所有」牛島巖・中山和芳編『オセアニア基層社会の多様性と変容——マイクロネシアとその周辺——』(国立民族学博物館研究報告別冊6号), pp. 203-228。
1992 「マイクロネシアのビーチコーマー」秋道智彌編『海人の世界』同文館 (in press)。
- O'BRIEN, Ilma E.
1979 *Cultural Continuity and Conversion in the Eastern Carolines: A Study of Interaction between Islanders and Christian Missionaries in Ponape and Kosrae*. Ph. D. Dissertation, La Trobe University.
- O'CONNELL, James F.
1972 *A Residence of Eleven Years in New Holland and the Caroline Islands by James O'Connell*. (Saul Riesenber ed.), Honolulu: University of Hawaii Press.
- PEOPLES, James G.
1985 *Island in Trust: Cultural Change and Dependence in a Micronesian Economy*. Boulder & London: Westview Press.
- PETERSEN, Glenn
1982 *One Man Cannot Rule a Thousand*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- RIESENBERG, Saul H.
1968 *The Native Polity of Ponape*. Smithsonian Contributions to Anthropology, vol. 10. Washington, D. C.: Smithsonian Press.
- RITTER, Philip L.
1978 *The Repopulation of Kosrae: Population and Social Organization on a Micronesian High Island*. Ph. D. Dissertation, Stanford University.
1981 *The Population of Kosrae at Contact*. *Micronesica* 17(1/2): 11-28.
- RITTER, Lynn Takata and Philip L. RITTER (trans. and eds.)
1982 *The European Discovery of Kosrae Island*. Micronesian Archaeological Survey Report 13. Saipan: Office of Historic Preservation.
- SARFERT, E.
1919-20 *Kusae. Ergebnisse der Südsee-Expedition, 1908-10*. 2 vols. (HRAF translation). Hamburg: Frederichsen.
- SCHAEFER, Paul Dufred
1976 *Confess Therefore Your Sins: Status and Sin on Kusaie*. Ph. D. Dissertation, University of Minnesota.
- SEGAL, Harvey Gordon
1989 *Kosrae: The Sleeping Lady Awakens*. Kosrae Tourist Division, Dept. of Conserva-

tion and Development, Kosrae State Government.

清水昭俊

1990 「ポーンベいの創世神話」伊藤亜人他編『民族文化の世界（上）：儀礼と伝承の民族誌』小学館，pp. 534-562。

SHIMIZU, Akitoshi

1982 Chieftdom and the Spatial Classification of the Life-world. In M. Aoyagi (ed.), *Islanders and Their Outside World*. Committee for Micronesian Research, St. Paul (Rikkyo) University, pp. 153-215.

WARD, R. Gerald (ed.)

1967 *American Activities in the Central Pacific 1790-1870*. vols. 3 and 4. Ridgewood, N. J.: The Gregg Press.

WARD, Roger L.

1977 Curing on Ponape. Ph. D. Dissertation, Tulane University.

WILSON, Walter Scott

1968 Land, Activity and Social Organization of Lelu, Kusaie. Ph. D. Dissertation, University of Pennsylvania.

矢内原忠雄

1935 『南洋群島の研究』岩波書店。